

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館蔵伝楠木正虎筆「金葉和歌集」の 解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畠山, 大二郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002369

國學院大學図書館蔵伝楠木正虎筆『金葉和歌集』の 解題と翻刻

畠山 大二郎

はじめに

本学図書館には、現在、伝楠木正虎筆本、伝為家筆清輔本、室町時代後期写の三本の『金葉和歌集』が所蔵されており^①、デジタルライブラリーで公開されている^②。『金葉和歌集』の本文については、先行研究によって整理されているが^③、各本それぞれ所収歌数や配列が異なり、國學院大學図書館蔵本もまた、それぞれに特色のある本文のようである。本稿では、この三本の中から伝楠木正虎筆『金葉和歌集』を翻刻し、その本文の特徴を明らかにしたい。

【書誌】

列帖装一帖。表紙は金茶色鳳凰宝相華唐草文裂、縦二五・五糎、横一七・一糎。朱題箋「金葉和歌集」、縦一四・六糎、横三・〇糎。見返し金紙。遊紙前後に各一丁。一面一〇行書き。和歌は基本的に一行書き。詞書は二字下げ。

箱書「金葉集 楠河内守正虎筆」。極札が二枚あり、「楠河内守入道長諱〔金葉和歌集全部／外題梶井殿應胤親王〕」、(裏)「発端うちなひき 四半本 壬午五」の極札には神田道伴の印、「金葉集 楠河内守正虎法名長諱」、(裏)「春

部／うちなびき」 四半 甲午六」の極札には古筆了音の印がみられる。奥書なし。二九丁ウに貼紙が一枚あり。

國學院大學図書館蔵伝楠木正虎筆『金葉和歌集』の本文

國學院大學図書館蔵伝楠木正虎筆本（以下、楠木本）の書写者とされる楠木正虎は、『日本人名大辞典』⁴によれば、永正十七年（一五二〇）生、慶長元年（一五九六）没。書道を飯尾常房に学び、剃髪した後に長諳と号して、織田信長、豊臣秀吉に仕えて祐筆となった人物である。また、外題は應胤親王の筆とされる。梶井宮応胤法親王は、享祿四年（一五三二）生、慶長三年（一五九八）没。伏見宮貞敦親王第五王子、後奈良天皇の猶子、梶井宮彦胤法親王の嗣子。初名は貞斉、のち還俗して尊悟。八条宮智仁親王に学び、和歌・詩・書を能くしたとされる人物である。

楠木本の本文は、藤原顕季の「うちなびき」の歌から始まっており、二度本系統に属する。そして、楠木本三九首目左兵衛督実能「この春は」と四〇首目内大臣「ちらぬまは」の間に左京大夫経忠「山桜」の歌がなく、夏部に大臣「卯の花の青葉も」の歌がないなど、第一類・第二類系統の特徴と一致しない。総歌数は、楠木本が六八〇首となっており、二度本第三類系統の善本とされるノートルダム清心女子大学正宗文庫蔵伝二条為明筆本の六六五首に近い。以上のことから、楠木本は正宗氏分類の第三類本に属するものと思われる。

第三類本（精撰本）は、さらに細かに分類されており、二度本最終稿本系統では、三七〇番俊頼朝臣「夜とともに」、三七六番読人不知「こひすてふ」、四〇九番左京大夫経忠「ひと夜とは」、四一五番皇后宮肥後「おもひやれ」四二〇番皇后宮別当「たのめおく」を所収しないのが共通パターンとされている。しかし、楠木本は三七〇、三七六番歌以外の、他三首を所収していることから、二度本第三類の中の最終稿本系統ではないことだけはわかる。

ところが、楠木本の九二首目、もりかね詠となつている「花のみや」の歌が所収されており、これは二度本第三類本では共通して所収されていない。また、この歌が所収されている諸本では、詠者は盛経母、あるいは盛家母、盛宗母と表記されており、「もりかね」とする本は今のところ確認できない。つまり、全体的には二度本第三類に分類できるのだが、第三類には見られない特徴も同時に持ち合わせているのである。

楠木本の他の特徴としては、漢字表記が比較的多く、作者名がひらがな表記になる箇所が散見される。作者名をひらがな表記するという書き方も、諸本では見られず、楠木本の特徴といえるであろう。また、歌は一行書きが基本となつているが、⁶⁾卷四冬部、卷六別離部、卷八恋部下、卷九雑部上、卷十雑下の最終歌だけが二行書きとなつている。異本注記は「イ」とされるところで二三箇所を数え、諸本では確認できない校異もあり、何の本を用いたかは不明である。ただし、七一丁ウに「諸本かくのことし」とあることから、いくつかの本をみていただろうことが想像される。本の上部に付箋のような紙が貼られた歌が一六首あり、楠木本にあつてノートルダム清心女子大学正宗文庫蔵伝二条為明筆本には所収されていない歌と一致する。⁷⁾ほかに小さく切つた赤紙が歌や詞書の頭などに貼つてあるが、何の目的かはよくわからない。

本文に関しても、楠木本一四首目藤原顕輔朝臣「けふやさは」の第四句「宮こになるゝ」は、異本注記のように諸本「みやこにいつる」であり、「なるゝ」とする本は確認できなかった。他にも一九首目大納言經信「けふこゝに」の第二句「みえこさりせは」は、諸本「みにこさりせは」であるなど、独自異文と思われる箇所がいくつかある。

この楠木本は、二度本第三類本に近似している本でありながら、その分類からは外れた特徴を持つている写本といえるだろう。楠木本だけにしか見られない特徴もあり、従来の分類を見直さなくてはならないのかもしれない。

注

(1) 『二十一代集』所収のものなどをのぞく。

(2) 國學院大學図書館ホームページ <http://k-aiser.kokugakuin.ac.jp/digital/menus/index05.html> で公開されている。

(3) 『金葉和歌集』は、三度にわたる奏覧により、初度本(初奏本)・二度本(二奏本)・三奏本の三系統の本文が伝えられている。そのうち、三奏本は二本しか伝わっておらず、もつとも流布しているのは二度本である。

二度本は、新日本古典文学大系の本文に採用されており、校註新訂日本文学大系や有朋堂文庫も同様である。新日本古典文学大系の底本は、「ノートルダム清心女子大学正宗文庫蔵伝二条為明筆本(複製本)」を用い、誤写・脱落を尊經閣文庫蔵伝二条為遠筆本、國學院大学蔵伝二条為家筆本、正保四年版本によって補訂した」とある。ノートルダム清心女子大学正宗文庫蔵伝二条為明筆本(複製)は、『ノートルダム清心女子大学古典叢書第二期『金葉和歌集』上・下』(福武書店 一九七七年)として出版されている。なお、校註新訂日本文学大系は、正保四年版本八代集を、有朋堂文庫は、正保四年版本と天和三年版本八代集(傍記)を校合して、和歌文学大系は、伝後京極良経筆三奏本を新編国歌大観と新大系で校合して底本としている。

初度本は、静嘉堂文庫のものが翻刻されており、三奏本は、和歌文学大系の底本となっている。

二度本の伝本が多いためであるが、新大系に補遺歌として記載されているものは五一首を数え、それぞれ諸本によって歌の異同がみられる。二度本の中でも校異は少なくなく、松田武夫氏『金葉集の研究』(パルトス社 一九五六年)、平澤五郎氏『金葉和歌集の研究』(笠間書院 一九七六年)によれば、二度本はさらに三種に分類することができるという。正宗敦夫氏『金葉和歌集講義』(自治日報社 一九六八年。諸本の系統は、松田氏の説に従うとされている)の分類では、

・第一類本(統群書類従本の初度本、岡田真君蔵本、伝公夏卿筆本)

・第二類本(八代集抄本、二十一代集本)

・第三類本(伝慈鎮筆本、伝為家筆本、同若書、伝覚誉法親王本、伝二条為明筆本、伝二条為忠筆本、長亨本金葉集、

天文本金葉集、伝山崎宗鑑筆本、為相相伝本写の金葉集、京大「長亨カ」五年本金葉集、建治奥書本)

とし、この三種もさらにいくつかの系統に分けることができるようである。

- (4) 第二卷 平凡社 一九七九年。應胤法親王については、第一卷を参考にした。
- (5) 歌番号は、新編国歌大観の「金葉和歌集二度本」の歌番号である。
- (6) 連歌は一字下げで上の句を書き、下の句は頭から書いている。ただし、第六六五首目の「はるの田の」の上の句は一字下げにしないなど、必ずしも一定はしていない。また、一行で書ききれない最後の数文字が左下に改行されて書かれているが、一行書きと判断した。
- (7) 一箇所だけ、為明筆本にも所収の歌がある。しかしこの歌は、楠木本五二二首目源行宗朝臣「つらかりし」で、為明筆本では三八一番歌となっている。よってこの箇所は、注記に「不審」とあるように順番が大きく変わっていることを示しているのではないだろうか。

【翻刻】

金葉和歌集 伝楠木正虎筆本 貴3196

〔白紙〕

「へ1丁オ」

金葉和詞集卷第一

春部

堀川院御時百首歌召けるに春たつ心をよめる

修理大夫顯季

・歌は基本的に一行書きであるが、誌面の都合上折り返して表記されている箇所がある。詞書に関しても、原本の改行そのままにしたが、折り返して表記されている箇所がある。

(1) うちなひき春は来にけり山川の岩まの氷けふやとくらん

春宮大夫公實

・漢字は通行のものを用いたが、旧字体や俗字に近い場合は、原本の表記にしたがった。

春たちてこすゑに消ぬしら雪はまたきにさける花かとそ

・「○」は補入記号。補入文が長い場合は「」内に入れた。

みる(2)

藤原顯仲朝臣

・「○」のない「」は行間に小さく書き込まれていることを示す。

いつしかと明ゆく空のかすめるはあまのとよりや春はた

・「へ」内は翻刻者注を示す。

つらん(3)

皇后宮肥後

「へ1丁ウ」

・「・」は赤貼紙、「※」は付箋を示す。

・()内の数字は歌番号を示す。

つらゝるし細たに川のとけゆくは水上よりや春はたつ覧

(4)

百首歌の中にはつ春の心をよめる

前斎宮内侍

春のくる夜のまのかせのいかなれは今朝ふくにしも氷と
くらむ(5)

はつ春のこゝろをよめる

大宰大貳長實

いつしかと春のしるしにたつものはあしたの原の霞なり
けり(6)

む月の朔日に雪のふり侍けるをみて遣しける

修理大夫顯季

あら玉の年のはしめにふりしけは初雪とこそいふへかり
けれ(7)

〔へ2丁オ〕

返し

春宮大夫公實

朝戸あけて春のこす糸の雪みれははつ花ともやいふへか
るらむ(8)

實行卿家哥合に霞のこゝろを讀る

少將公教母

浅みとりかすめる空のけしきにやときはの山は春をしる
覧(9)

藤原顯輔朝臣

年ことにかはらぬものは春かすみたつたの山の気色なり
けり(10)

霞の心をよめる 大宰大貳長實

あつさ弓はるのけしきに成にけりいるさの山にかすみた
なひく(11)

百首歌中に鶯の心をよめる

〔へ2丁ウ〕

修理大夫顯季

鶯のなくにつけてやまかねふくきひの山人はるをしるら
む(12)

はしめて鶯を聞といふことをよめる

春宮大夫公實

けふよりや梅のたちえに鶯のこゑさとなる、はしめなる
らん(13)

む月の八日の日春の立けるに鶯のなきけるを聞て

よめる

藤原顕輔朝臣

けふやさは雪うちとけて鶯の宮いつるイこになるゝはつねなるら

む(14)

暁聞鶯といへることをよめる

源雅兼朝臣

「(3丁オ)

けれ(17)

梅花夜薰といへる事を 前大宰大貳長房「(3丁ウ)

梅かえにかせや吹らむ春のよはおらぬ袖さへにほひぬる

哉(18)

朱雀院に人々まかりて閑庭梅花といへることを

よめる

大納言經信

うくひすの木つたふさまもゆかしきに今一こゑは明は
てゝなけ(15)

皇后宮にて人々哥つかうまつりけるに雨中

鶯といへることを讀る源としよりの朝臣

春雨はふりしむれとも鶯のこゑはしほれぬ物にそありけ
る(16)

良暹法師しのひて物へまかりけるに左大辨經

頼か家のむめのさかりにさきたりければ門にひねも
す

に立くらして夕かたいひ入侍ける

良暹法師

梅花にほふあたりはよきてこそいそくみちをは行へかり

けふこゝにみえこさりせは梅花ひとりや春の風にちらま
し(19)

道雅卿家歌合に梅花をよめる

藤原兼房朝臣

ちりかゝるかけはみゆれと梅花水に春こそうつらさりけ
れ(20)

梅花をよめる

源忠季

限ありてちりははつとも梅花香をは梢にのこせと思ふ
(21)

子日の心をよめる

大中臣公長朝臣

「(4丁オ)

春日野のねの日の松はひかてこそ神さひゆかむかけにか
くれめ(22)

大蔵卿匡房

※はるかすみたちかくせとも姫小松ひくまの野へに我は
きにけり(23)

柳糸随風 院御製

・かせふけは柳のいとのかたよりになひくにつけて過る
春かな(24)

百首哥中に柳をよめる

春宮大夫公實

朝まだき吹くるかぜにまかすれはかたよりしけりあをや
きの糸(25)

池岸柳を讀る 源雅兼朝臣

・風ふけは波のあやをる池水に糸引そふる岸の青柳
(26)

「4丁ウ」

よふこ鳥を讀る 前斎院尾張

いとか山くる人もなき夕くれにこゝろほそくも喚子鳥か

な(27)

霞中帰鴈をよめる 藤原成通朝臣

こゑせすはいかてしらまし春霞へたつる空にかへる鴈か
ね(28)

帰鴈をよめる ふちはらのつねみち

今はとて越路にかへる鴈かねははねもたゆくや行かゝる
らん(29)

花薰風といへることをよめる

攝政左大臣

吉野山みねのさくらやさきぬらんふもとのさとに匂ふは
るかせ(30)

白河花見御幸に 新院御製

「5丁オ」

尋つるわれをや花も待つらむいまそさかりににほひまし
ける(31)

太政大臣

しら河のなかれひさしき宿なれば花のにほひものとけか
りけり(32)

人にかはりて讀る 大宰大貳長實

ふく風も花のあたりは心せよけふをはつねの春とやはみ
る (33)

待賢門院兵衛

よろつ世のためしとみゆる花の色をうつしとゞめよしら

川の水 (34)

源雅兼朝臣

年ことにさきそふやとの桜花なをゆくすゑの春そゆかし
き (35)

宇治前太政大臣京極家御幸によませ給へる

「(5丁ウ)

り (37)

松間桜花といへる事をよめる

内大臣

春ことに松のみとりにうつもれて風にしらねぬ(ママ)花
さくら哉 (38)

左兵衛督實能

この春はのとかににほへ桜花えたさしかはす松のしるし
に (39)

「(6丁オ)

花為春友

内大臣

ちらぬまは花を友にて過ぬへし春より後のしる人もかな
(40)

新院御かたにて花契週年といへる事をよめる

待賢門院中納言

春霞たちかへるへき空そなき花のにほひに心とまりて
(36)

遠山桜といへることをよめる

春宮大夫公實

しら雲とをちの高ねにみえつるは心まとはすさくらりけ

(41)

よろつ世にみるへき花の色なれと今日のにほひはいつか

藤原顯輔朝臣

忘れん(42)

終日尋花といへることをよめる

源貞亮朝臣

白雲にまかふ桜をたつぬとてかゝらぬ山のなかりつるかな(43)

「へ6丁ウ」

堀川院御時女房たちを花山のはなみせにつかはし
たりけるかかへりまいりて御前にて歌つかうまつり
けるにかはりてよませ給ける

堀川院御製

よそにては岩こそ瀧とみゆるかな嶺のさくらや盛なるらむ(44)

源師俊朝臣

けふくれぬあすも来てみむ桜花心してふけ春の山かせ(45)

翫山花といへる心を讀る 大宰大貳長實

かゝみ山うつろふ花をみてしより面影にのみたゝぬ日そなき(46)

深山花

撰政左大臣

「へ7丁オ」

みねつゝきにほふ桜をしるへにてしらぬ山ちにかゝりぬる哉(47)

人々にさくらの哥十首つゝよませ侍けるに讀る

修理大夫顕季

桜花さきぬる時はよしの山たちものほらぬ嶺のしらくも(48)

山花留人

大中臣公長朝臣

おのゝえはこのもとにてやくちなまし春をかきらぬ桜なりせは(49)

宇治前太政大臣家哥合によめる

皇后宮撰津

散つもる庭をそ見まし桜花かせよりさきに尋さりせは(50)

源俊頼朝臣

「へ7丁ウ」

山さくらさきそめしより久堅の雲井にみゆる瀧のしら糸(51)

遙見山花といへる事をよめる

大蔵卿匡房

はつせ山雲井に花の咲ぬれはあまの川なみたつかとそみる(52)

藤原忠隆

よしのやま巖に浪よるしら雲とみゆるは花のこすゑ成けり(53)

堀川院御時女御殿の女房たちあまたくして花

見ありきけるに讀る前齋院筑前乳母

・春ことにあらぬにほひを桜花いかなる風のおしまさるらむ(54)

人にかはりてよめる 僧正行尊 「(8丁オ)

・よそにてはをしみにきつる花なれとおらてはえこそ帰ましけれ(55)

後冷泉院御時皇后宮の哥合に桜をよめる

堀川右大臣

春雨にぬれてたつねん山さくら雲のかへしのかせもこそ

ふけ(56)

月前見花といへる心をよめる

大蔵卿匡房

月影に花みる夜はのうき雲はかせのつらさにをとらさりけり(57)

顯季卿家にて桜哥十首人々によませ侍けるに

よめる 大宰大貳長實

※・春の日の長閑き空にふる雪は風にみたる、花にそ有ける(58) 「(8丁ウ)

水上の落花といへることをよめる

源雅兼朝臣

花さそふ嵐やみねをわたる覧桜なみよる溪川の水(59)

落花満庭といへる事をよめる

左兵衛督実能

今朝みれば夜はのあらしに散はて、庭こそ花のさかりなりけれ(60)

堀川院御時中宮御かたにて風静花香といへる

事をつかうまつれる 源俊頼朝臣

落花散衣といへる事をよめる

「(9丁ウ)

こすゑにはふくともみえて桜花かほるそかせのしるしな
りける (61)

ふちはらの永實

落花の心を

長實卿母

「(9丁オ)

ちりかゝるけしきは雪の心ちして花には袖のぬれぬなり
けり (66)

・春ことにおなし桜の花なれはおしむ心もかはらさりけ
り (62)

散花随風といへることをよめる

堀川院御時花の散たるをかきかつめて大なる
ものゝふたに山のかたにつませ給ひて中宮御かた
にたてまつらせ給たりけるをみや御覽して
うたよめとおほせ事ありけはつかうまつりける

右兵衛督伊通

うらやましいかにふけはか春風の花を心にまかせそめけ

御匣殿

む (63)

桜花くもかゝるまでかきつめてよしのゝ山とけふはみる

水上落花をよめる

かな (67)

大納言經信

はなの庭にちりつもりたるをみて讀る

水上に花やちる覧山河の井くひにいとゝかゝるしらなみ

郁芳門院安藝

「(10丁オ)

(64)

藤原成通朝臣

水のおもにちりつむ花をみる時そはしめて風はうれしか

き (68)

りける (65)

夜思落花といへることをよめる

庭の花もとのこすゑに吹かへせちらすのみやは心なるへ

隆源法師

衣手にひるはちりつるさくら花よるは心にかゝるなりけり (69)

春ものへまかりけるに山田つくりけるをみてよめる

高階経成朝臣

・桜さく山田をつくるしつのおはかへすくや花をみるらん (70)

後冷泉院御時月あかゝりける夜女房たちを

くして南殿にわたらせ給けるに庭の花かつ散て

おもしろかりけるを御覧してこれ見しりたらむ

「〈10丁ウ〉

人にみせはやと仰ことありて中宮の御かたに下野

あらんとてめしにつかはしたりければまいりたるを

御らんしてあの花おりてまいれと仰事ありければ

おりて参たりければたゞにてはいかゝと仰ことありけ

れはつかうまつりける 下野

・なかき夜の月のひかりのなかりせは雲井の花をいかて

おらまし (71)

新院の北面にて殘花薰風といへる事をよめる

中納言雅定

ちりはてぬ花のありかをしらすれはいとひしかせそけふはうれしき (72)

ならにて人々百首歌よみけるに早蕨をよめる

「〈11丁オ〉

権僧正永縁

山さとは野へのさわらひもえいつるおりにのみこそ人は

問くれ〈ママ〉 (73)

百首哥のなかにかきつはたをよめる

修理大夫顕季

あつまちのかほやかぬまの杜若はるをこめてもさきにけ

る哉 (74)

春田をよめる 大納言つねのふ

荒小田にほそ谷川をまかすれば引しめ繩にもりつゝそゆ

く (75)

苗代を讀る 津守国基

鳴のゐる野澤の小田をうちかへし種まきてけりしめはへ
てみゆ(76)

〔12丁オ〕

後冷泉院御時弘徽殿の女御の哥合に苗代 〔11丁ウ〕

前大宰大貳長房

の心をよめる 藤原隆資

山さとの外面のをたの苗代に岩まの水をせかぬ日そなき

(77)

・家の山吹を人々あまたまうてきて遊けるついでに
おりけるをみてよめる中納言雅定

晚見躑躅といへることをよめる

摂政家参河

入日さす夕くれなるの色はへて山下てらす岩つゝし哉

(82)

・わかやとに又こむ人も見る斗おりなつくしそ山吹の花

院北面にて橋上藤花といへる事を

(78)

大夫典侍

水邊款冬 攝政左大臣

・かきりありて散たにおしき山吹をおりなつくしそいで

(83)

の川なみ(79)

藤花をよめる 藤原顕輔朝臣

おなし心をよめる 大宰大貳長実

むらさきの色のゆかりにふちの花かゝれる松もむつまし

春ふかみ神なひ川に影みえてうつろひにけり山吹の花

きかな(84)

〔12丁ウ〕

(80)

坊のふちのさかりなるをみてよめる

(89)

律師増覚

隣家藤花といへる事を内大臣家越後

くる人もなきわかやとの藤花たれをまつとて咲かゝるらん (85)

あし垣の外とはみれとふちの花にほひは我をへたてさりけり (90)

紫藤蔵松といへることをよめる

三月盡の心を讀る 大僧都證観

良暹法師

・松かせのをとせさりせは藤なみをなにゝかゝれる花としらまし (86)

春のゆくみちにきむかへ郭公かたらふこゑにたちやとまると (91)

二条院関白家にて池邊藤花といへる事をよめる

※花のみやくれぬる春のかたみとて青葉のしたに散のこ

大納言経信

るらん (92)

池にたつ松のはひえにむらさきの浪をりかくるふち咲に

中納言雅定

「(13丁ウ)

けり (87)

百首歌中に藤花をよめる修理大夫顕季 「(13丁オ)

のこりなくくれぬる春を惜むとて心をさへもつくしつる哉 (93)

すみよしの松にかゝれる藤花かせのたよりに波やかおるイく

三月盡によする恋といへる事を

ん (88)

内大臣

雨中藤花といへる事を 神祇伯頭仲

春はおし人はこよひとたのむれはおもひわつらふけふの

ぬるゝさへうれしかりけり春雨に色ます藤の雫と思へは

くれかな (94)

撰政左大臣家にて人々に三月盡のころをよませ

侍けるによめる 源俊頼朝臣

かへる春う月のいみにさしこめてしはしみあれの程まで
もみん (95)

重服に侍けるとし三月盡の心をよめる

藤原顕輔朝臣

おもひやれめぐりあふへき春たにも立わかるゝはかなし
き物を (96)

「14丁オ」

應徳元年四月二条内裏にて庭樹結葉と

いへる事をよませ給ける 院御製 「14丁ウ」

・をしなへてこすゑ青葉に成ぬれば松のみとりもわかれ
さりけり (99)

大納言經信

玉かしは庭も葉ひろになりけりこや夕してゝ神まつる
比 (100)

鳥羽殿にて人々歌つかうまつりけるに卯花を

よめる 春宮大夫公實

・雪の色をぬす^{うはひイ}みてさける卯花に小野の里人冬こもりす
な (101)

卯花連垣といへることをよめる

大蔵卿匡房

・われのみそいそきたゝれぬ夏衣ひとへに春をおしむ身
なれは (97)

二条関白家にて人々餘花のころをよませ

侍けるに讀る ふちはらのもりふさ

・いつれをか分ておらまし山さとの垣ねつゝきにさける
うの花 (102)

うの花をよめる 江侍従 「15丁オ」

夏山の青葉ましりの遅桜はつ花よりもめつらしき哉 (98)

雪としもまかひもはてす卯花はくるれは月の影かともみ

ゆ (103)

撰政左大臣

卯花のさかぬかきねはなけれども名になかれたる玉川の

さと (104)

卯花誰垣といへることをよめる

中納言實行

神山のふもとにさけるうの花はたかしめゆひしかきねな

るらん (105)

卯花をよめる 大納言経信

しつのめかあし火たくやも卯花のさきしか、れはやつれ

さりけり (106)

鳥羽殿哥合にほと、きすをよめる

修理大夫顕季

「(15丁ウ)

深山いて、またさとなれぬ郭公たひの空なるねをやなく

覧 (107)

尋郭公といへる事をよめる

藤原節信

けふも又たつねくらしつ杜鵑いかて聞へきはつねなるら

ん (108)

郭公の歌十首人々によませ侍ける次に

撰政左大臣

ほと、きす姿は水にやとれともこゑはうつらぬ物にそ有

ける (109)

源雅光

郭公なきつとかたる人つてのこの葉さへそうれしかり

ける (110)

杜鵑をたつねける日はきかて二日はかり有て聞て

「(16丁オ)

よめる

橘成元

ほと、きす音羽の山のふもとまでたつねしこゑをこよひ

聞かな (111)

長實卿の家の哥合によめる

左京大夫経忠

としことに聞とはすれと郭公こゑ^はふりせぬ物にそありける (112)

待郭公 内大臣

恋すてふなき名やたゝん郭公まつにねぬよの数しつもれは (113)

ほとゝきすをよめる 藤原顕輔朝臣

郭公こゝろも空にあくかれて夜かれかちなるみ山へのさと (114)

承暦二年内裏哥合に人にかはりてよめる」(16丁ウ)

ふちはらの孝善

ほとゝきすあかて過ぬるこゑにより跡なき空を詠つるかな (115)

時鳥をよめる 権僧正永縁

聞たひにめつらしければ郭公いつもはつねの心ちこそすれ (116)

源俊頼朝臣

待かねてたつねさりせは郭公たれとか山のかひになかま

し (117)

郭公驚夢といへる事をよめる

中納言實行

おとろかすこゑなかりせは郭公またうつゝにはきかすやあらまし (118)

待時鳥といへる事を院御製

」(17丁オ)

ほとゝきすまつにかゝりてあかす哉藤の花とや人のみる

覧 (119)

俊忠卿家哥合によめる

二条関白家筑前

待人のやとをはしらて時鳥をちの山へを鳴て過なり (120)

中納言女王

ほとゝきすほのめくこゑをいつ方と聞まとはしつ明ほのゝ空 (121)

郭公をよめる 前齋院六条

やとちかくしはしかたらへ時鳥まつよの数のつもるしる

しに (122)

中納言雅定

源定信

〔18丁ウ〕

郭公まれになくよは山ひこのこたふるさへそうれしかり
ける (123)

〔17丁ウ〕

わきもこにあふさか山の郭公あくればかへる空に鳴なり
(127)

時鳥をたつぬといへることをよめる

前宇治太政大臣家哥合によめる

よみ人しらす

康資王母

山ちかく浦こく舟はほとゝきす時わたるこそとまりなり

時鳥たつぬるたにもあるものを待人いかてこゑを聞らん
(128)

けれ (124)

雨中郭公といへる事をよめる

匡房卿美作守にてくたりける時道にて時鳥のなく

大納言經信

をきゝてよめる 中原高真

ほとゝきす雲ちにまとふ聲すなりをやみたにせよさみた

聞もあへす漕そわかるゝ時鳥我こゝろなる舟出ならねは

れの空 (129)

(125)

五月五日實行卿もとにくす玉つかはすとて

月前郭公といへることをよめる

内大臣

〔○皇后宮式部〕

時鳥雲のたえまをもる月の影ほのかにも鳴わたるかな

あやめ草ねたくも君かとはぬ哉けふは心にかゝれと思ふ
に (130)

(126)

〔18丁ウ〕

曉聞郭公といへる事をよめる

永承四年殿上の根合にあやめをよめる

大納言經信

よろつ世にかはらぬものは五月雨の雫にかほるあやめ成
けり (131)

郁芳門院根合に菖蒲をよめる

藤原孝善

あやめ草ひくてもたゆく長根のいかてあさかの沼に生け
ん (132)

承暦二年内裏哥合にあやめをよめる

春宮大夫公實

玉江にやけふのあやめは引つらんみかける宿のつまにみ
ゆるは (133)

宮つかへしける女のもとに五月五日くすたまつかは

す
「(19丁オ)

とて
権僧正永縁母

あやめ草わか身のうきに引かへてなへてならぬに生も出
なん (134)

百首歌中に菖蒲をよめる

春宮大夫公實

菖蒲くさよとのおふる物なればねなから人は引にや有
らん (135)

五月五日家にあやめふくをみてよめる

右
左近府生奏兼久

おなしくほとゝのへてふけ菖蒲草さみたれたらはもりも
こそすれ (136)

むかし中院にすませ給ける程はみえさりけるあやめ
を人の中院のなと申けるをみてよませ給ける

「(19丁ウ)

三宮 輔仁

あさましやみしふるさとのあやめ草わかしらぬまにおひ
にける哉 (137)

百首歌の中にさみたれをよめる

参議師頼

五月雨にぬまの岩かき水こえてまこもかるへきかたもし
られす (138)

さみたれの心を讀る ぶちはらのさたみち

さみたれは日数へにけりあつまやのかやか軒はのしたく
つるまで (139)

承暦二年内裏の哥合によめる

源道時朝臣

さみたれに玉江のみつやまさるらん蘆のした葉のかくれ
行かな (140)

「〈20丁オ〉

俊忠卿家歌合に五月雨の心をよめる

藤原顕仲朝臣

五月雨に水まさるらし澤田川まきのつき橋うきぬはかり
に (141)

さみたれの心をよめる 左兵衛督実能

・さみたれは小田のみなくちてもかけて水の心にまかせ
てそみる (142)

三宮

五月雨にいり江の橋のうきぬれはおろすいかたの心ちこ

そすれ (143)

摂政左大臣家にて夏月の心をよめる

神祇伯顕仲

夏の夜の庭にふりしくしら雪は月の入こそきゆるなりけ
れ (144)

「〈20丁ウ〉

俊忠卿家の哥合に水鶏の心をよめる

藤原顕綱朝臣

さとことにたゝく水鶏のこゑす也こゝろもとなる宿やな
からん (145)

攝政左大臣家にて水鶏の心をよめる

源雅光

夜もすからはかなく叩くゐなかなさせるともなき柴のか
りやを (146)

實行卿家哥合に夏風の心を讀る

修理大夫顕季

夏衣すそのゝ草をふくかせにおもひもあへす鹿や鳴らむ
(147)

水風晚涼といへる事をよめる

「〈21丁オ〉

みなもとのとしよりの朝臣

風ふけははすのうき葉に玉こえてすゝしく成ぬ日くらし
のこゑ (148)

照射のこゝろを 源仲正

澤水にほくしのかけのうつれるを二ともしとや鹿のはなくイみる
らむ (149)

神祇伯顯仲

鹿たゝぬは山かす所に照射していく夜かひなきよをあか
すらん (150)

家の哥合に花橘を讀る中納言俊忠

さ月やみ花たち花のありかをは風のつてにそ空に知けるぬイ
(151)

百首哥中に花たちはなをよめる

春宮大夫公実

「(21丁ウ)

やとことに花たちはなそにほふなる一本かすゑに風はふ
けとも (152)

二条関白家にて雨後野草といへる事をよめる

源俊頼朝臣

・このさとも夕立しけり浅茅生に露のすからぬ草の葉も
なし (153)

實行卿家歌合に鵜川の心をよめる

中納言雅定

大井河いくせうふねの過ぬらんほのかになりぬかゝり火
の影 (154)

夏月をよめる 源親房

玉くしけ二かみ山の木のまよりいつれはあくる夏のよの
月 (155)

六月廿日ころに秋節になる日人のかりつかはしける

「(22丁オ)

摂政左大臣

みな月のてる日の影はさしなから風のみ秋の気色なる哉
(156)

公實卿家にて對水待月といへる事をよめる

ふちはらのもとし

夏のよの月まつほとの手すさひに岩もる清水いくむすひ
しつ (157)

秋隔一日といへることをよめる

中納言顯隆

御祓するみきはにかせの涼しきは一夜をこめて秋やたつ
らん (158)

「〈22丁ウ〉

金葉和歌集卷第三

秋部

百首歌中に秋たつこゝろをよめる

春宮大夫公實

とことほに吹ゆふくれのかせなれと秋たつ日こそすゝし
かりけれ (159)

野草結露といへる事をよめる

大宰大貳長実

まくすはふあたの大野のしら露を吹なはらひそ秋のはつ
かせ (160)

後冷泉院御時皇后宮の春穠の哥合に七夕

のこゝろをよめる 土佐内侍 「〈23丁オ〉

よろつ世に君そみるへき織女のゆきあひの空を雲のうへ
にて (161)

たなはたの心をよめる

能因法師

たなはたの苔のころもをいとすは人なみくにかしも
してまし (162)

七月七日父のふくにて侍けるとしよめる

橘元任

ふち衣いみもやすると七夕にかさぬにつけてぬるゝ袖か
な (163)

七夕の心をよめる 前齋院河内宮イ

こひくゝてこよひはかりや織女の枕にちりのつもらさる
らん (164)

三宮

「〈23丁ウ〉

天河わかれにむねのこかるれはかへさの舟はかちもとら

れす (165)

中納言国信

たなはたにかける衣の露けさにあかぬけしきを空にしる
哉 (166)

七夕後朝の心をよめる 内大臣

かきりありてわかるゝ時もたなはたの涙の色はかはらさ
りけり (167)

皇后宮権大夫師時

たなはたのあかぬ別のなみたにや花のかつらも露けかる
らん (168)

内大臣家越後

あまの川かへさの舟に波かけよのりわつらはゝ程もふは
かり (169)

かへるさはあさせもあらし天河あかぬなみたに水しまさ
らは (170)

「(24丁オ)

草花告秋といへることをよめる

源雅兼朝臣

さきそむるあしたの原の女郎花あきをしらすつまにそ
有ける (171)

おなしこゝろを 源縁法師

さきにけりくちなし色のをみなへしいはねとしるし秋の
けしきは (172)

秋のはしめふしみにて山家秋来といへる心を

大納言経信

・をのつから秋すきにけり山さとの葛はひかゝるまきの
ふせやに (173)

田家早秋といへる事をよめる

右兵衛督伊通

「(24丁ウ)

いなはふく風のをとせぬ宿ならはなにゝつけてか秋をし

らまし (174)

山家秋といへることをよめる

ふちはらのゆきもり

山ふかみとふ人もなき宿なれと外面の小田に秋は来にけ
り (175)

師賢朝臣の梅津に人々まかりて田家秋風といへる

ことをよめる 大納言経信

夕されはかと田のいなはをとつれて蘆のまるやに秋かせ
そふく (176)

三日月の心をよめる 大江公資朝臣

山のはにあかて入ぬる夕月夜いつ有明にならんとすらむ

(177)

摂政左大臣家にて夕月夜の心をよませ侍」(25丁オ)

けるによめる 藤原忠隆

風ふけはえたやすからぬ木間よりほのめく秋の夕月夜哉

(178)

月旅宿友といへる事をよめる

法橋忠命

草枕このたひねにそおもひしる月より外の友なかりけり

(179)

閑月見といへることをよめる

顯仲卿女

もろともに草葉の露のおきるすはひとりや見まし秋のよ

の月 (180)

明月をよめる 前中納言伊房

いつはりになりそしぬへき月影をこのみるはかり人にか
たらは (181) 』(25丁ウ)

鳥羽殿にて旅宿月といへることをよめる

春宮大夫公實

われこそは明石のせとに旅ねせめおなし水にもやとる月

哉 (182)

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて池上翫月といへる

ことを 院御製

いけ水にこよひの月をうつしもてこゝろのまゝにわか物

とみる (183)

大納言経信

てる月の岩ま〇の水にやとらすは玉あるかすをいかてしら

まし (184)

翫明月といへる事をよめる

民部卿忠教

「(26丁オ)

惜けれ (189)

水上月をよめる 前斎院六條

いつくにもこよひの月をみる人の心やおなし空にそむら
ん (185)

雲のなみかゝらぬさ夜の月かけを清瀧川にうつしてそみ
る (190)

後冷泉院御時皇后宮歌合に駒迎のこゝろを

九月十三夜閑見月といへる事をよめる

よめる

藤原隆經朝臣

みなもとのとしよりの朝臣

ひくこまの数より外にみえつるは関のしみつの影にそ有
ける (186)

すみのほる心や空をはらふらん雲のちりるぬ秋の夜の月
(191)

駒迎の心をよめる 源仲正

月をよめる 皇后宮肥後

東路をはるかに出るもち月の駒にこよひや逢坂の関
(187)

月をみておもふ心のまゝならはゆくゑもしらすあくかれ
なまし (192)

八月十五夜の心を読む 源親房

人のもとにまかりて物申ける程に月の入ければ

さやけさはおもひなしかと月影を今夜としらぬ人にと

よめる 源師俊朝臣 「(27丁オ)

はゝや (188)

閏九月あるとしの八月十五夜によめる

いかにしてしからみかけむあまの川なかるゝ月やしはし

春宮大夫公實

「(26丁ウ)

よとむと (193)

經長卿かつらの山さとにて人々歌よみけるによめる

・秋はなをのこりおほかる年なれとこよひの月の名こそ

大納言経信

こよひわれかつらのさとの月をみておもひのこせること
のなき哉 (194)

承暦二年内裏哥合に月をよめる

春宮大夫公實

・くもりなき影をとゝめは山の端に入とも月をおしまさ
らまし (195)

宇治前太政大臣家歌合によめる

皇后宮撰津

てる月のひかりさえ行宿なれば秋の水にもつらゝるにけ
り (196)

「27丁ウ

源俊頼朝臣

山のはに雲のころもをぬきすてゝひとりも月のすみのほ
るかな (197)

水上月 攝政左大臣

あしねはひかつみもしけきぬま水にわりなくやとる夜は
の月哉 (198)

宇治前太政大臣家歌合に月の心をよめる

一宮紀伊

かゝみ山嶺よりいつる月なればくもる夜もなき影をこそ
みれ (199)

秋なにはのかたにまかりて月のあかゝりける夜くし
たる人ゝ哥よみ侍けるによめる

参議師頼

「28丁オ

いにしへのなにはの事を思ひいてゝたかつの宮に月のす
むらん (200)

秋月如晝といへることを藤原隆經朝臣

菊の上に露なかりせはいかにしてこよひの月をよるとし
らまし (201)

翫明月といへる事を讀る 源行宗朝臣

なこりなく夜はの嵐に雲はれて心のまゝにすめる月かな
(202)

八月十五夜人ゝ歌よみけるによめる

平師季

みかさ山ひかりをさしてしよりくもらてあけぬ秋の

よの月 (203)

宇治前太政大臣卅講哥合によめる

よみ人しらす

「(28丁ウ)

春日山みねより出る月かけはさほの川瀬の氷なりけり
(208)

顯季卿家にて九月十三夜月哥よみけるによめる

大宰大貳長実

宿からそ月のひかりもまさりけるよのくもりなくすめは
なりけり (204)

月をよめる

藤原忠隆

・くまもなき鏡と見ゆる月影にこゝろうつらぬ人はあら
しな (209)

俊頼朝臣

※ながむれは更ゆくまゝに雲はれて空ものとかにすめる
月かな (205)

奈良花林院哥合によめる

権僧正永縁

・
へココヨリ貼紙表
むら雲や月のくまをはのこふらん晴ゆくたひに照まさる
哉 (210)

月照古橋といへることをよませ給へる

三宮

いかなれは秋はひかりのまさるらんおなしみかさの山の
はの月 (206)

月をよめる

藤原顯輔朝臣

とたえして人もかよはぬたな橋に月斗こそ澄わたりけれ
(211)

水上月をよめる 藤原実光朝臣

三笠山もりくる月の清ければ神のこゝろもすみやしぬら
ん (207)

へココマデ貼紙表

太皇太后宮扇合に月の心をよめる

大納言経信

「(29丁オ)

へココヨリ貼紙裏

月影のさすにまかせて行舟は明石の浦やとまりなるらん

(212)

権僧正永縁

題しらす 太宰大貳長實

さらぬたに玉にまかひてをく露をいとみかける秋のよ

・もろともにつとはなしに有明の月のみをくる山ちを
そゆく (217)

の月 (213)

對山待月といへる事を 土御門右大臣 師房

永承四年殿上歌合によめる

あり明の月まつ程のうた、ねは山のはのみそ夢に見えけ

修理大夫顕季

る (218)

〈ココマデ貼紙裏〉

山家暁月をよめる 中納言顕隆

夜と、もにくもらぬ空のうへなれはおもふ事なく月をみるかな (214)

山さとの門田のいねのほのくどあくるもしらす月をみる哉 (219)

月前旅宿といへることをよめる

月のあか、りける比赤石にまかりて月みてのほりた

修理大夫顕季

り

松かねに衣かたしき夜もすからなかむる月をいもみるら

けるに都の人々に月はいかにと尋けるを聞て

めや (215)

「〈30丁オ〉

獨見月といへる事を 藤原有教母

「〈29丁ウ〉

平忠盛朝臣

なかむれはおほえぬ事もなかりけり月やむかしの形見なるらん (216)

あり明の月もあかしの浦かせに浪はかりこそよるとみえしか (220)

行路暁月といへることを

月前落葉といへる事をよめる

源としよりの朝臣

嵐をやはもりの神もたゝるらむ月に紅葉の手向しつれば

(221)

むしをよめる 前斎院六條

露しけき野へにならひて蛭わか手枕のしたに鳴なり

(222)

はたおりといへるむしをよめる

顯仲卿女

さゝかにの糸引かくる草むらにはたをる虫のこゑきこゆ

なり (223)

「(30丁ウ)

題しらす よみ人しらす

玉章はかけてきつれと鴈かねのうはの空にもきこゆなる

哉 (224)

春宮大夫公實

いもせ山嶺のあらしやさむからん衣かりかね空に鳴なり

(225)

しかをよめる 三宮大進

つまこふる鹿そなくなるひとりねの床の山かせ身にやし

むらん (226)

暁聞鹿といふ事を 皇后宮右衛門佐

おもふ事あり明かたの月影にあはれをそふるさをしかの

こゑ (227)

夜聞鹿といへる事を 内大臣家越後

夜はになくこゑに心そあくかるゝわか身はしかのつまな

らねとも (228)

「(31丁オ)

摂政左大臣家にて旅宿鹿といへる事をよめる

源雅光

さもこそは宮ここひしき旅ならめ鹿のねにさへぬるゝ袖

哉 (229)

百首歌中に鹿の哥とて

藤原顯仲朝臣

世中を秋はてぬとやさをしかの今はあらしの山になく

らんイ
なり (230)

野花帯露といへることを

皇后宮肥後

しら露と人はいへとも野へみれはをく花ことに色そかは
れる (231)

太皇太后宮扇合に人にかはりて萩の心を」(31丁ウ)

よめる 僧正行尊

小萩はらにほふあたりはしら露もいろくにこそ見えわ
たりけれ (232)

萩をよめる 大宰大貳長実

・しらすけのまの、萩原露なからおりつる袖そ人などか
めそ (233)

女郎花を 隆源法師

女郎花さける野へにそやとりぬる花の名たてに成やしぬ
らん (234)

顕隆卿家哥合に女郎花をよめる

中納言俊忠

夕露の玉かつらしてをみなへし野原のかせにおれやしぬ
らん (235)

女郎花をよめる 藤原顕輔朝臣

白露やこゝろをくらん女郎花色めく野へに人かよふとて
(236)

摂政左大臣

をみなへし夜のまのかせにおれふしてけさしも露に心を
かるな (237)

摂政左大臣家にてふちはかまをよめる

源忠季

さほ川のみきはにさける藤袴なみのよりてやかけんとす
らん (238)

蘭をよめる 右兵衛督伊通

かりにくる人もきよとや蘭秋の野ことにしかのたつらん
(239)

神祇伯顕仲

さゝかにの原のとちめやあたならんほころひわたる蘭か
な (240)

」(32丁ウ)

鳥羽殿前裁合に女郎花をよめる

春宮大夫公實

あたしのゝ露ふきみたる秋かせになひきもあへぬをみな
へし哉 (241)

野花留人といへることをよめる

平忠盛朝臣

ゆく人をまねくか野への花薄こよひもこゝに旅ねせよと
や (242)

堀川院御時御前にて薄をよめる

平忠盛朝臣

・鶉なくまのゝいり江のはまかせにおはななみよる秋の
夕くれ (243)

河霧をよめる 　　ふちはらのもとみつ 　　「(33丁オ)

宇治川のかはせもみえぬ夕霧にまきの嶋人舟よはふなり

(244)

郁芳門院根合に菊をよめる

中納言通俊

さかりなるまかきの菊を今朝みればまた空さへぬ雪そふ
りける (245)

鳥羽殿前裁合によめる

修理大夫顕季

・千年まで君かつむへき菊なれば露もあたにはをかしと
そおもふ (246)

摂政左大臣家にて紅葉隔垣といへることをよめる

藤原仲實朝臣

鴟のゐるはしのたちえのうす紅葉たれわかやとの物とみ
るらむ (247) 　　「(33丁ウ)

承暦二年内裏哥合にもみちの心をよめる

源師賢朝臣

はゝき木のこすゑやいつこおほつかなみなそのはらはも
みちしにけり (248)

宇治前太政大臣大井河にまかりたりけるに罷て

水邊紅葉といへることをよめる

大納言經信

大井川いは波たかし筏士よ岸のもみちにあからめなせそ

まつ (254)

(249)

太皇太后宮扇合に人にかはりてよめる

大井逍遙に水上落葉といへる事をよめる」〔34丁ウ〕

・音羽山もみち散らし逢坂のせきのを川に錦をりかく(250)

藤原伊家

落葉をよめる

藤原伊家

」〔34丁オ〕

は、そちる岩まをかつく鴨とりはをのか音羽もみちしにけり (255)

谷川にしからみかけよたつた姫岸のもみちに嵐ふくなり

落葉埋橋といへる事をよめる

(251)

大井河の御幸につかうまつりける

修理大夫顕季

修理大夫顕季

をくら山みねのあらしの吹からに谷のかけ橋紅葉しにけり (256)

大井河るせきの音のなかりせはもみちをしけるわたりと

落葉蔵水といふことを

やみむ (252)

深山紅葉といへることをよめる

大中公長朝臣

大納言經信

大井河ちるもみち葉にうつもれてとなせの瀧は音のみそする (257)

山守よをのゝ音たかくひゝく也嶺のもみちはよきてきら

九月盡のこゝろを 中原経則

せよ (253)

紅葉をよめる

神祇伯顯仲

あすよりは四方の山への秋霧の面影にのみたゝんとすらん (258)

余所に見るみねのもみちやちりくると麓のさとは嵐をそ

」〔35丁オ〕

源師俊朝臣

草のはにはかなくきゆる露をしもかたみにをきて秋のゆ
くらん (259)

九月盡日大井にまかりてよめる

春宮大夫公實

・おしめとも四方のもみちはちりはてゝ

となせそ秋のとまりなりける (260)

「(35丁ウ)

しくれつゝかつちる山のもみちはをいかにふく夜の嵐な
るらん (262)

奈良に人々百首歌よみけるに時雨をよめる

権僧正永縁

「(36丁オ)

山川の水はまさらて時雨にはもみちの色そふかく成ける

(263)

撰政家参河

神無月しくれの雨のふるたひにいろくになるすゝか山
かな (264)

後朱雀院御時霧蔵紅葉といへる事をよめる

中納言資仲

〔冬部〕
承暦元年御前にて殿上をのことも韻をさ
くりて哥つかうまつりけるに時雨をこりてつかうま
つりける 源師賢朝臣

神無月しくるゝまゝにくらふ山したてるはかり紅葉しに

けり (261)

もみちちる山は秋霧はれせねはたつたの川のなかれをそ
みる (265)

大井にまかりて落葉をよめる

平致親

・従二位藤原親子家造昏合に雨晨をよめる

修理大夫顕季

大井河もみちをわくる筏士は棹にしきをかけてこそみ
れ (266)

落葉をよめる 大納言経信

「〈36丁ウ〉

皇后宮肥後

みむろ山もみち散らしたひ人のすけのを笠に錦をりかく

(267)

ひをのよる川瀬にみゆるあしろ木はたつしら波の上にや
あるらん (271)

月照網代といへる事をよめる

竹風似雨といへることをよめる

大納言経信

中納言基長

なよ竹の音にそ袖をかつきつるぬれぬにこそはかせとし

りぬれ (268)

月きよみせゝのあしろによるひをは玉もにさゆる氷なり
けり (272)

旅宿冬夜といへる事を

十月十日比に鹿の鳴けるをきゝて

法印光清

・たひねする夜床さえつゝ明ぬらしとかたそ鐘のこゑき

こゆ也 (273)

なに事に秋はてなからさをしかのおもひかへしてつまを

関路千鳥といへることをよめる

こふらん (269)

源兼昌

「〈37丁ウ〉

百首歌中にもみちをよめる

源俊頼朝臣

たつた川しからみかけて神なひのみむろの山の紅葉をそ

あはち嶋かよふ千鳥のなくこゑにいくよねさめぬすまの
せきもり (274)

みる (270)

「〈37丁オ〉

氷をよめる

藤原隆経朝臣

高せ舟さほの音にそしられぬる蘆まの氷一重しにけり

おなし百首に網代を

(275)

谷水結氷といへる事を 内大臣

谷川のよとみにむすふ氷こそみる人もなき鏡なりけれ

(276)

百首歌中に氷を讀る ふちはらの仲実

しなかつりゐなのふしはら風さえてこやの池水こほりし

にけり (277)

冬月をよめる 神祇伯頭仲

冬さむみ空にこほれる月影は宿にもるこそきゆるなりけ

れ (278)

氷満池上といへる事をよめる

「(38丁オ)

大納言經信

水鳥のつらゝの枕あともなしむへさえけらしとふのすか

こも (279)

深山霰をよめる 大蔵卿匡房

・はし鷹のしらふに色やまかふらんとかへる山に霰ふる

なり (280)

水邊寒草といへる事をよめる

大中臣公長朝臣

・たかねには雪ふりぬらしまは川ほきのかげ草たるひ

さかれり (281)

宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる

源頼綱朝臣

衣手によこのうらかせさえく／＼てこたかみ山は雪ふりに

けり (282)

「(38丁ウ)

橋上初雪といへる事をよめる

前齋院尾張

しら浪のたちわたるかとみゆる哉はまなの橋にふれる初

雪 (283)

はつ雪をよめる 大納言經信

はつ雪はまきの葉しろく降にけりこやをの山の冬のさひ

しさ (284)

雪中鷹狩を讀る 源道濟朝臣

ぬれくもなをかりゆかむはしたかの上毛の雪をうちは

らひつゝ (285)

鷹狩のこゝろを 源としよりの朝臣

はしたかをとりかふ澤のかけみれは我身もともにとやか
へりせり (286)

内大臣家越後

「(39丁オ)

大嘗会主基方備中国弥高山をよめる

「(39丁ウ)

藤原行盛

雪ふれはいや高山のこす糸にはまた冬なから花さきにけ
り (291)

雪哥とて

源俊頼朝臣

ことはりやかたのゝをのになく雉子さこそはかりの人は
つらけれ (287)

百首歌中に雪の心をよめる

大蔵卿匡房

いかにせむす糸の松山なみこさは嶺のはつ雪消もこそす
れ (288)

宇治前太政大臣家歌合に雪をよめる

皇后宮撰津

ふる雪にすきの青葉もうつもれてしるしもみえす二わの
山もと (289)

中納言女王

岩代のむすへる松にふる雪は春もとけすやあらんとすら
ん (290)

雪の御幸にをそくまいり侍ければしきりにをそ

きよしの御使たまはりてつかうまつれる

六条右大臣 顕房

朝ことのかゝみのかけにおもなれて雪見にとてもいそか
れぬ哉 (293)

すみかまをよめる 皇后宮権大夫師時

炭かまにたつけふりさへをの山は雪けの空と見ゆるなり
けり (294)

「(40丁オ)

百首歌中に雪をよめる

隆源法師

宮こたに雪ふりぬれはしからきのまきの柚やま跡たえぬ
らん (295)

皇后宮肥後

みちもなくつもれる雪に跡たえて古郷いかにさひしかる
らむ (296)

選子内親王いつきにおはしましける時雪のふりたるに

月あかゝりけるにま・(赤貼紙ガズレタカ)いりたりけ

れと女房たちね

たりけるにや月も見さりければ殿上のみすにむすひ

つけゝるうた 藤原兼房朝臣

かきくらし雨ふる夜はやいかならん月と雪とはかひなか

りけり (297) 「(40丁ウ)

冬月をよめる 源雅光

あらし山雪ふりつもる高ねよりさえてもいつる夜はの月

哉 (298)

家經朝臣かつらの山里の障子絵に神樂したる所

をよめる

康資王母

・榊葉やたちまふ袖のをひかせになひかぬ神はあらしと
そ思ふ (299)

神樂をよめる 皇后宮権大夫師時

神かきのみむろの山に霜ふれはゆふしてかけぬ榊はそな
き (300)

氷の心をよませたまひける

三宮

つなかねとなかれもゆかす高瀬舟むすふ氷のとけぬかき
りは (301) 「(41丁オ)

水鳥をよめる 前齋院六条

※・なか／＼に霜のうはきをかさねてやをしの毛衣さえ

まさるらん (302)

池氷をよめる 前齋院^{宮イ}内侍

浪枕いかにうきねをさたむらん氷ます田の池の鴛とり (303)

修理大夫顕季

さむしろにおもひこそやれさゝの葉にさゆる霜よのをし

のひとりね (304)

しはすの廿日ころ依花待春といへる事を

内大臣

なにとなく年のくるゝはおしけれと花のゆかりに春を待
かな (305)

歳暮の心をよめる 藤原成通朝臣 「(41丁ウ)

人しれすくれゆく年をおしむまに春いとふ名の立ぬへき
哉 (306)

摂政左大臣家にて各の題ともさくりてうたよみ

けるに歳暮をとりてよめる

ふちはらの永實

かそふれはのこりすくなき身にしあればせめても惜きと
しのくれ哉 (307)

この哥讀てのとしの内に身まかりにけるとそ

歳暮のこゝろをよませたまひける

三宮

いかにせむくれゆく年をしるへにて身を尋つゝ老はきに

けり (308)

おなし心をよめる 中原長国

「(42丁オ)

としくれぬとはかりこそはきかまし我身のうへにつも
らさりせは (309)

中納言国信

なに事をまつとはなしにあけくれて

ことしもけふに成にける哉 (310)

「(42丁ウ)

金葉和詞集巻第五

賀部

長治二年二月五日内裏にて竹不改色といへる

ことをよませ給ける

堀川院御製

千世ふれとおもかはりせぬ川竹はなかれての世のためし
なりけり (311)

郁芳門院根合によめる

六条右大臣

よろつ世はまかせたるへし石清水なかき流を君によそへ
て(312)

堀川院御時中宮はしめてわたりたまふ時松契

「(43丁オ)

藤原国行

「(43丁ウ)

・をのつからわか身さへこそいはるれ誰か千世にもあ
はまほしさに(316)

百首歌中に祝のころをよめる

としよりの朝臣

遐年といへる事をよめる 大納言俊實

水の面に松のしつえのひちぬれは千年は池のこゝろなり

けり(313)

於禁中翫花といへる事をよめる

中納言実行

・君か世は松の上葉にをく露のつもりて四方の海となる
まで(317)

祝心をよめる 大納言経信

きみか代の程をはしらてすみよしの松をひさしと思ひけ
るかな(318)

後一条院御弘徽殿女御歌合によめる

永成法師

花契遐年といへることを

源師俊朝臣

よろつ世とさしてもいはし桜花かさらん春しかきりなけ

れは(315)

君か世はす糸の松山はるくくとこすしら波の数もしられ
す(319)

嘉承二年三月鳥羽殿行幸に池上花をよ 「(44丁オ)

橘俊經朝臣家哥合によめる

ませ給ける

堀川院御製

いけ水の底さへにほふ桜花みるともあかし千代の春まで

(320)

大嘗会主基方辰日参音聲つゝみ山をよめる

ふちはらの行盛

をとたかきつゝみの山のうちはへてたのしき御代となる

そうれしき (321)

悠紀方の朝日郷を 藤原敦光朝臣

くもりなき豊明にあふみなるあさ日のさとはひかりさし

そふ (322)

巳日楽破に雄琴郷をよめる

・松かせのをことの里にかよふにそおさまれる世の聲は

きこゆる (323)

後冷泉院御時大嘗会主基方備中国二万 一〇四丁ウ

郷をよめる 藤原家経朝臣

御調物はこふよほろをかそふれは二万のさと人数そひに

けり (324)

同国のいなるといへるところを人にかはりて

高階明頼

苗代の水はいなるにまかせたり民やすくなる君か御世か

な (325)

祝の心をよめる 皇后宮肥後

いつとなく風吹空にたつちりの数もしられぬ君か御世か

な (326)

花契遐年といへる事をよめる

大宰大貳長実

はなもみな君か千とせをまつなれはいつれの春か色もか

はらん (327)

一〇四丁オ

撰政左大臣中将にて侍ける比春日使にてくたり侍け

る

に周防内侍女〇使にてくたりけるに為隆行幸弁

にて侍けるにつかはしけるうた

周防内侍

いかはかり神もあはれと三笠山二葉の松の千世のけしき

を (328)

題しらす

藤原道つね

・實行卿の家の哥合にゆはひの心を

君か代はいく萬世かかさぬへきいつぬき川の鶴の毛ころ
も (329)

ふちはらの為忠

宇治前太政大臣家哥合に祝の心をよめる

ん (334)

「(46丁ウ)

中納言通俊

君か世はあまのこやねのみことよりいはひそ初し久かれ
とは (330)

「(45丁ウ)

前中宮はじめて内へいらせ給ける夜雪のふりて侍け
れは六条右大臣のもとへつかはしける

宇治前太政大臣

大藏卿匡房

君か世はかきりもあらし三笠山峯にあさ日のさゝんかき
りは (331)

る (335)

かへし

六条右大臣

新院北面にて藤花懸松といへる事をよめる

つもるへし雪つもるへし君か世は松の花さへ千たひみる

大夫典侍

まで (336)

ふちなみは君か千とせの姿にこそかけてひさしくみるへ
かりけれ (332)

天喜四年皇后宮哥合に祝の心をよませ給ける

後冷泉院御製

祝のこゝろをよめる 源忠季

君か世はとみのを川の水すみて千年をふとも絶しとそお
もふ (333)

世かな (337)

松上雪を

源頼家朝臣

「(46丁ウ)

よろつ世のためしと見ゆる松のうへに雪さへつもる年に
も有かな (338)

前齋宮伊勢におはしましける比いしなとりの

石を合といへることをせさせ給けるに祝の心をよめる

源としよりの朝臣

くもりなくとよさかのほる朝日には君そつかへん萬代ま
てに (339)

〔47丁オ〕

める

堀川右大臣

かへるへき旅のわかれとなくさむる心にたかふ涙なりけ
り (342)

〔47丁ウ〕

題しらす

よみ人しらす

をくれゐてわか恋をれはしら雲のたなひく山をけふや越
らむ (343)

經輔卿つくしへくたり侍けるにくしてまかりける時

道より上東門院に侍ける人のかりつかはしける

前大宰大貳長房

金葉和哥集卷第六

別離部

兼房朝臣丹後になりてくたりける日つかはし

ける 大納言經長

君うしや花の宮この花をみて苗代みつにいそく心よ

(340)

返し

藤原兼房朝臣

よそにきく苗代水にあはれわかおりたつ名をもなかしつ

る哉 (341)

重尹帥下向し侍ける比人々饑し侍ける時よ

マ

〔48丁オ〕

かたしきの袖にひとりはおかせともおつる涙そよをかさ
ねける (344)

これを御覽してかたはらにかきつけさせ給ける

上東門院

わかれちをけにいかはかり歎らんきく人さへそ袖はぬれ

ける (345)

源公定か大隈守にてくたりける時月のあかゝりマ

夜別をしみてよめるみなもとの為成

はるかなるたひの空にもをくれねはうら山しきは秋のよ
の月 (346)

對馬守に槻のあきみちかくたりける時つかはしける

友政朝臣妻 (ママ)

おきつしま雲ゐのきしを行かへりふみかよはさん幻もか
な (347)

俊頼朝臣伊勢国へまかる事ありていてたちける

とき人々餞し侍けるによめる

参議師頼

いせのうみをのゝ古江にくちはてゝ都のかたへかへれと
そ思ふ (348)

源行宗朝臣

「48丁ウ」

待つけんわか身なりせは帰へき程をいくたひ君にとはま
し (349)

百首歌中にわかれの心をよめる

中納言国信

けふはさはたちわかるともたよりあらは有やなしやの情

忘るな (350)

ふちはらの基俊

秋霧のたちわかるへき君によりはれぬ思ひにまとひぬる

哉 (351)

橘為仲朝臣みちのくにへまかりけるに人々餞し

はへりけるによめる 藤原実綱朝臣

人はいさ我身はすゑに成ぬれば又あふ坂もいかゝまつへ

き (352)

藤原有貞

「49丁オ」

恋しさはその人かすにあらすとも都をしのふうちにいれ

なん (353)

經平卿つくしへまかりけるにくしてまかりける日公

実卿

のもとへつかはしける 中納言通俊

さしのほる朝日にきみを思ひいてんかたふく月に我を忘

るな (354)

みちのくにへまかりける時あふ坂のせきよりみやこ

つれなかりける女のもとへつかはしける」〔50丁オ〕

へつかはしける 橘則光

我ひとりいそくとおもひし東路に

春宮大夫公実

かきねの梅はさきたちにけり (355)

これにしくおもひはなきを草枕たひにかへすはいなむし

「〔49丁ウ〕

ろとや (359)

顯季家にて人々戀哥よみけるによめる

金葉和歌集卷第七

藤原顯輔朝臣

戀部上

五月五日はしめて女のかりつかはしける

あふとみてうつゝのかひはなけれどもはかなき夢そいの
ちなりける (360)

小一條院

女のかりつかはしける 源雅光

・しらさりつ袖のみぬれてあやめ草かゝる恋ちにをひん

逢まてはおもひもよらす夏引のいとおしとたにいふとき

物とは (356)

かはや (361)

女のかりつかはしける 大江公資朝臣

・従二位藤原親子家造昏合に恋のこゝろをよめる

しのすゝきうは葉にすかくさゝかにのいかさまにせは人

宣源法師

なひきなむ (357)

いまはたゝねられぬいをそ友とする恋しき人のゆかりと

暁恋をよめる 神祇伯顯仲

思へは (362)

「〔50丁ウ〕

さりともとおもふかきりはしのはれて鳥とともにそねは

なかれける (358)

大宰大貳長實

おもひやれすまのうらみてねたる夜のかた敷袖にかゝる
涙を (363)

・物申ける人のかみをかきこして見けるをみてよめ
る

津守国基

朝ねかみたか手枕にたはつけてけさは形身にふりこして
みる (364)

題しらす よみ人しらす

恋すてふ名をたになかせ涙川つれなき人もきゝやわたる
と (365)

なにせむにおもひかけゝん唐衣恋する事はみさほならぬ
に (366)

中納言雅定

あふ事はいつとなきさのはま千鳥浪のたちぬにねをのみ
そなく (367)

「(51丁オ)

ある宮はらに侍ける人のしのひて宮を出てあやし
の所にて物申て又の日つかはしける

春宮大夫公實

おもひいつやありしその夜のくれ竹はあさましかりしふ
し所哉 (368)

顯季卿家にて寄織女恋の心をよめる

少将公教母

たなはたは又こむ秋も契るらんあふ夜もしらぬ身をいか
にせむ (369)

寄水鳥恋といへる事をよめる

源師俊朝臣

水鳥のはかせにさはくさゝ波のあやしきまてにぬるゝ袖
かな (370)

「(51丁ウ)

寄夢恋といへることをよめる

左兵衛督実能

夢にたにあふとはみえよさもこそはうつゝにつらき心な
りとも (371)

たいしらす 中納言顯隆

しら雲のかゝる山ちをふみゝてそいとゝ心は空になりけ

る (372)

たのめてあはぬ恋のこゝろをよめる

源顕国

あひみむとたのむれはこそくれはとりあやしやいかゝた
ちかへるへき (373)

しのふ恋の心を讀る中納言實行

谷川のうへは木葉にうつもれてしたになかると人しるら
めや (374)

「(52丁オ)

月前に人をこふといへる事をよめる

ふちはらのもとみつ

なかむれは恋しき人の恋しきにくもらはくもれ秋のよの
月 (375)

題しらす よみ人しらす

つらしともをろかなるにそいはれけるいかに恨と人にき
かせむ (376)

物申ける人の前中宮にまいりにければ名残を恋

て月のあかゝりける夜いひつかはしける

藤原知房朝臣

面影はかすならぬ身に恋られて雲井の月をたれとみるら
ん (377)

さはる事ありてひさしうをとつれさりける女のもと
より 「(52丁ウ)

いひをくり侍ける よみ人しらす

あさましやなとかきたゆるもしほ草さこそはあまのすさ
ひなりとも (378)

ふみはかりをこせていひたえにける人のもとに遣ける

内大臣家小大進

ふみそめておもひかへりし紅の筆のすさひをいかてみせ
けむ (379)

實行卿家歌合に恋の心をよめる

長実卿母

しるらめや淀のつきはしよとともにつれなき人を恋わた
るとは (380)

ふちはらの道經

・恋わひておさふる袖やなかれ出る涙の川のゐせきなる
らむ (381)

「〈53丁オ〉

少将公教母

なかれての名にそたちぬる涙川人めつゝみのせきしあへ
ねは (382)

題しらす

皇后宮右衛門佐

涙川袖のゐせきもくちはてゝよとむかたなき恋もする哉

(383)

源顕国朝臣

かくとたにまたいはしろの結松むすほゝれたる我心かな

(384)

女のかりつかはしける 藤原顕輔朝臣

恋すてふもしのせきもりいくたひかわれはきつらん心つ

くしによイ (385)

左兵衛督実能

いのちたにはかなからすは年ふとも相みむことをまたま
しものを (386)

「〈53丁ウ〉

後朝の心をよめる 源行宗朝臣

つらかりし心ならひにあひみても猶夢かとそうたかはれ
ける (387)

堀川院御時艶書合によめる

春宮大夫公実

おもひあまりいかでもらさむおくら山のいはかきこむる
谷のしたみつ (388)

恋の心を

ふちはらの顕輔朝臣

年ふれと人もすさめぬわか恋やくち木の袖のたにのむも
れ木 (389)

あるましき人をおもひかけてよめる

よみひとしらす

いかにせむかすならぬ身にしたかはてつゝむ袖よりおつ
る涙を (390)

「〈54丁オ〉

院の熊野にまいらせおはしましたりける時御迎にま

いりて旅の床露けかりければよめる

大宰大貳長実

夜もすから草の枕にをく露は故郷こふるなみたなりけり

(391)

橘季通

てなど申ければよめる

野分したりけるにかゝたと音信たりける人のその
後又もと○せさりければつかはしける

相模

なそもかく恋ちにたちてあやめ草あまりならひく五月な
るらん (395)

人のかりつかはしける 神祇伯頭仲 「55丁オ」

あらかりし風のゝちより絶ぬるはくもてにすかく糸にや
あるらん (392)

国信卿家歌合に夜恋の心をよめる

源俊頼朝臣

「54丁ウ」

をのつから夜かるゝ床のさむしろはなみたのうきになる
としらすや (396)

人を恨てつかはしける 藤原惟規

夜とともに玉ちる床のすか枕みせはや人に夜はの気色を

(393)

五月五日わりなくてもりいてたる所にこもといへる

ものをひきたりしも忘かたさにいひつかはしける

相模

女のもとにまかりたりけるに今夜はかへりねと申け
れは

帰にけるのちひとひはいかゝおもひしなど申たり

ければいひつかはしけるふちはらの正家

あやめにもあらぬまこもを引かけしかりのよとのゝ忘ら
れぬかな (394)

閏五月侍けるとし人をかたらひけるに後五月すき

秋かせに吹かへされてくすの葉のいかに恨し物とかはし
る (398)

かたらひ侍ける人のあるうちに申さずる事のあり

ければいひつかはしける 藤原有教母

したかへは身をも捨てん心にもかなはてとまる名こそ惜
けれ (399) 「〈55丁ウ〉

俊忠卿家にて恋哥十首つゝよみけるに誓て

不逢といへる事を 藤原道経 皇后宮式部イ
あひみての後つらからは世々をへてこれよりまさる恋に
まとはん (404)

長実卿家歌合に恋のこゝろを

ふちはらの忠隆

実行卿家哥合に恋の心をよめる

源としよりの朝臣

つゝめとも涙の面のしけゝれは恋する名をもふらしつる
哉 (400)

いつとなく恋にこかるゝ我身よりたつやあさまの煙なる
らむ (405)

人を恨てつかはしける ふちはらの惟規

恋哥とてよめる ふちはらの成通朝臣

嶋かせにしはたつなみのやちかへりうらみても猶たのま
るゝかな (401)

後の世とちきりし人もなき物をしなはやとのみいふそは
かなき (406)

なき名たてける人のかりつかはしける

摂政左大臣

前斎宮内侍

あさましやあふせもしらぬ名取川またきにいほまもらす
へしやは (402)

いはぬまはしたはふあしの根をしけみ隙なき恋を人しる
らめや (407) 「〈56丁ウ〉

会不逢恋の心を〇 よめる 左京大夫経忠

かたらひける人のかれくゝに成てうらめしかりけれ

一夜とはいつかちきりし河竹のなかれてとこそ思ひそめ
しか (403) 「〈56丁オ〉

はいひつかはしける 白川女御越中
待し夜のふけしをなにと歎けん思ひたえてもすくしける

身を(408)

恋の心を人々よみけるによめる

律師実源

いのりをしかけて契し中なれはたゆるはしぬる心ちこそ
すれ(409)

旅恋のこゝろを 摂政左大臣

みせはやな君しのふねの草枕玉ぬきかくるたひのけしき
を(410)

恋の心を 皇后宮美濃

かきたえて程もへぬるかさゝかにのいまは心にかゝらす
もかな(411)

「(57丁オ)

堀川院御時艶書合につかうまつれる

皇后宮肥後

おもひやれとはて程ふる五月雨にひとりやともる袖のし
つくを(412)

皇后宮にて文をかへさるゝ恋といへる事をよめる

美濃

・こふれとも人の心のとけぬにはむすはれなからかへる

玉札(413)

人々に恋のうたよませ侍けるに人にかはりて

摂政左大臣

・心さしあさちかすゑにをく露のたまさかにとふ人はた
のまし(414)

しのふ恋をよめる よみ人しらす

「(57丁ウ)

忍ふれとかひもなきさのあまを舟なみのかけても今はう
らみし(415)

雲居寺哥合に人にかはりてよめる

三宮大進

なそもかく身にかふはかり思ふらんあひみん事も人のた
めかは(416)

寄花恋の心を讀る 摂政左大臣

あたなりし人の心にくらふれは花もときはの物にそあり
ける(417)

百首歌中に恋のこゝろをよめる

修理大夫顕季

・わか恋はからす羽にかくことの葉のうつさぬ程はしる人もなし (418)

摂政左大臣家にて戀のこゝろをよめる 「(58丁オ)

源雅光

あやにくにこかるゝむねもある物をいかにかはかぬ袂なるらん (419)

寄山恋といへる事をよめる

大中臣公長朝臣

恋わひておもひ入さの山の端にいつる月日のつもりぬるかな (420)

つれなかりける人にあふよしの夢をみてつかはしける

ふちはらの公教朝臣

うたゝねにあふとみつるはうつゝにてつらきを夢とおもはましかは (421)

俊忠卿家にて恋哥十首人々よみけるにくれ

ともとゝまらすといへることをよめる 「(58丁ウ)

源としよりの朝臣

・おもひくさ葉すゑにむすふしら露のたま〜きては手にもたまらす (422)

女を恨てつかはしける 春宮大夫公実

あしねはふみつの上とそおもひしをうきは我身にありけるものを (423)

重服になりたる人のたちなからまうてこんと

申たりければ遣ける 橘俊宗女

たちなからきたりとあはし藤衣ぬきすてられん身そと思へは (424)

恋の心を人にかはりてよめる

前中宮上総

石はしる瀧のみなかみはやくより音に聞つゝ恋わたるか
な (425) 「(59丁オ)

題しらす

皇后宮別當

たのめをくことの葉たにもなき物をなにゝかゝれる露の
いのちそ (426) 「〈59丁ウ〉

金葉和調集卷第八

戀部下

初恋のこゝろを讀る 良暹法師

かすめてはおもふ心をしるやとて春の空にもまかせつる
かな (427)

公任卿家にて紅葉あまのはしたて恋と三の題を
人々によませけるにをそくまかりて人々みなかき
ける程に成にければ三の題をひとつによめる哥

藤原範永朝臣

恋わたる人にみせはや松の葉もしたもみちする天のはし
たて (428)

後朝恋をよめる 源師俊朝臣

「〈60丁オ〉

しのゝめの明ぬく空もかへるには涙にくるゝ物にそあり
ける (429)

月増恋 内大臣

いとゝしく面影にたつこよひかな月にはとしもちきらさ
りしに (430)

恋の心をよめる 藤原顕輔朝臣

恋わひてねぬ夜つもればしきたへの枕さへこそうとくな
りけれ (431)

鳥羽殿歌合に恋のこゝろをよめる

藤原仲實朝臣

夜とともに袖のかはかぬ我恋やとしまか磯にかへるしら
波 (432)

晩恋といへることをよめる

中納言雅定

「〈60丁ウ〉

あふ事をこよひと思はゝ夕つくひ入山のはもうれしから
まし (433)

恋のこゝろをよめる 右兵衛督伊通

山の井の岩もと水に影みれはあさましけにも成にけるか
な (434)

皇后宮にて人々恋のうたつかうまつりけるによめる

大宰大貳長實

みちのくのおもひしのふにありなから心にかゝるあふの
松はら(435)

ならの人々百首哥よみけるに恨恋のこゝろをよ

める

権僧正永縁

おもはむとたのめし人のむかしにもあらすなるとのうら
めしき哉(436)

恋の心をよめる

隆源法師

「(61丁オ)

くるゝまもさためなき世にあふ事をいつともしらて恋わ
たる哉(437)

源家時かれくゝに成にけるを恨ていひつかはしける

前中宮越後

人こゝろあさ澤水のねせりこそかるはかりにもつまゝほ
しけれ(438)

恋哥十首人々よみけるにたち聞てこふといふ

ことをよめる

修理大夫顕季

わきもこかこゑたち聞しから衣その夜の露に袖はぬれに

き(439)

われをはかれくゝになりてこと人のかりまかると
聞てつかはしける よみ人しらす

ことはりやおもひくらふの山桜にほひまされる花をめつ
るも(440)

「(61丁ウ)

郁芳門院根合によめる

周防内侍

恋わひてなかむる空のうき雲やわかしたもえの煙なるら
ん(441)

人をうらみて五月五日につかはしける

前齋宮河内

あふことのひさしにふけるあやめ草たゝかりそめのつま
とこそみれ(442)

恋のこゝろを

大宰大貳長実

つらさをもおもひもしらぬ身の程に恋しさいかて忘さる

らん(443)

題しらす

前中宮上総

さきの世の契りをしらはかなくも人をつらしと思ひける哉(44)

「(62丁オ)」

恋の哥よみける所にてよめる

源としよりの朝臣

わすれ草しけれるやとをきてみればおもひのきよりおふるなりけり(45)

人をうらみて

よみ人しらす

いまよりはおもひもいてしうらめしといふもたのみのかゝるかきりそ(46)

遇不逢恋の心をよめる

左兵衛督実能

おもひきや相みし夜はのうれしさに後のつらさのまさるへしとは(47)

人をうらみけるころ心ちの例ならすおほえければ

よみ人しらす

「(62丁ウ)」

あはすともなからん世にはおもひいてよ我ゆへ命たえし人そと(48)

女のかりつかはしける 藤原永実

する墨もおつる涙にあらはれて恋しとたにもえこそかれね(49)

家の哥合に恋の心をよめる

中納言国信

色見えぬこゝろはかりはしつむれと涙はえこそしのはさりけれ(50)

たいしらす

よみ人しらす

あふ事は夢はかりにてやみにしをさこそみしかと人にかたるな(51)

大納言経信

・あし垣にひまなくかゝる蜘蛛のいの物むつかしくしけるわかこひ(52)

「(63丁オ)」

藤原忠隆

・をさふれとあまる涙はもる山のなけきにおつる雫なり

けり (453)

人をうらみて歎侍ける比月をみてよめる

橘俊宗母

いかにせむなけきのもりはしけれども木のまの月のかくれなき身を (454)

物申ける人のひさしう音もせさりければつかはしける

前斎肥前

かやふきのこやわすらるゝつまならん久しく人の音つれもせぬ (455)

恋の心をよめる 左兵衛督実能

わか恋のおもふはかりも色にいてはいはても人に見えまし物を (456)

「(63丁ウ)

もろともに郭公をまちけるにさはる事ありて入に

けるのち鳴つやと尋けるを聞てよめる

春宮大夫公實

時鳥雲井のよそになりしかは里そなこりの空になかれし

(457)

冬の恋といへる事をよめる

ふちはらの成通朝臣

水のおもにふるしら雪の程もなくきえやしなまし人のつらきに (458)

多門といへるわらわをよひにつかはしたりけるにみえ

さりければ月のあかゝりけるよゝめる

権僧正永縁

「(64丁オ)

待人のおほ空わたる月ならはぬるゝ袂にかけはみてまし

(459)

寄水鳥恋

撰政左大臣

逢事のなこえにあさる蘆かものうきねをなくと人はしらすや (460)

人を恨てよめる ふちはらの盛經母

さのみやはわか身のうきになしはてゝ人のつらさを恨さるへき (461)

撰政左大臣家にて恋の心をよめる

源雅光

名にたてるあはてのうらのあまたにも見るめはかつく物
とこそきけ (462)

うらめしき事あるにつけてもむかしをおもひいてら
るゝ

事ありて

前斎宮甲斐

「(64丁ウ)

いま人の心をみわの山にてそすきにしかたはおもひしら
るゝ (463)

わすれたる人のおもひいてゝをとつれたるに

橘俊宗母

めつらしや岩まによとむ忘水いくかを過て思ひいつらん

(464)

山の歌合に恋のこゝろをよめる

よみ人しらす

・たまさかにあふ夜は夢の心ちしてこひしもなとかう
つゝなる覧 (465)

いかにもとおもふ人のさもあらぬさきにさそなと人
の

申ければよめる 中原章經

恋わふるきみにあふてふことの葉はいつはりさへそうれ
しかりける (466)

「(65丁オ)

伊賀少将かもとへつかはしける

前帥資仲

よもの海のうらく／＼ことにあされともあやしくみえぬい
けるかひ哉 (467)

返し

伊賀少将

・たまさかに波のたちよるうらく／＼はなにのみるめのか
ひかあるへき (468)

題しらす

上総侍従

あさましくなみたにかふ我身かな心かろくはおもはさ
りしを (469)

ものへまかりける道にはしたものゝあひたりけるをと
はせ侍ければ上東門院に侍すまるこそと申といひ

けるを聞てよめる 源縁法師

「(65丁ウ)

ほしけれ(474)

返し

一宮紀伊

名きくよりかねてもうつる心かないかにしてかはあふへ
かるらむ(470)

音にきくたかしの浦のあた浪はかけしや袖のぬれもこそ
すれ(475)

恋のこゝろをよめる 民部卿忠教

くれにはかならずとたのめたりける人の廿日の月の
出る

恋わひてたえぬおもひの煙もやむなしき空の雲となるら
ん(471)

まて見えさりければよめる

女のかりつかはしける 大納言經信

摂政家堀川

あふ事はいつともなくてあはれわかしらぬ命に年をふる
かな(472)

契りをきし人もこそすゑの木間よりたのめぬ月の影そもり
くる(476)

人のもとにて女房のなかき髪をうち出してみせ

こゝろかはりたる人のもとへつかはしける

ければよめる 藤原顕綱朝臣

江侍従

人しれすおもふ心をかなへ南かみあらはれて見えぬとな
らは(473)

めのまへにかはる心をなみた川なかれてやとも思ひける
かな(477)

堀川院御時艶書合によめる

「(66丁ウ)

中納言俊忠

「(66丁オ)

国信卿家歌合にはしめたる恋の心をよめる

源兼昌

人しれすおもひありその浦かせになみのよるこそいはま

けふこそはいはせのもりのした紅葉色にいつれは散もし

ぬらめ (478)

雪の朝出羽弁かもとより帰侍けるにかれより

をくりて侍ける 出羽辨

をくりてはかへれとおもひし玉しるの行きすらひて今朝

はなき哉 (479)

返し

大納言經信

冬の夜の雪けの空にいてしかはかけより外に送やはせし

(480)

すみかをしらぬ恋といへる心をよめる

前齋院六条

「(67丁オ)

ゆくゑなくかきこもるにそひきまゆのいとふ心の程はし

らるゝ (481)

世にあらんかきりは忘れしと契ける人の久しうをと

つれさりければよめる よみ人しらす

人はいさありもやすらん忘られてとはれぬ身こそなき心

ちすれ (482)

年ころ物申ける人のたえてをとつれさりければ

つかはしける

はやくよりあさき心と見てしかはおもひたえにき山川の

水 (483)

題しらす

もらさはや細たに川の埋水影たにみえぬ恋にしつむと

(484)

男のけふはかた違に物へまかるといはせて侍けれ〇_は

つか

「(67丁ウ)

はしける

君こそは一夜めくりの神ときけなにあふ事の方たかふら

む (485)

朝恋をよめる

藤原顕輔朝臣

あつさ弓かへるあしたのおもひにはひきくらふへきこと

のなき哉 (486)

人のもとより袖のぬるゝさまをみせはやなと申

たりければよめる 皇后宮少将

うらむとも見るめもあらし物ゆへになにかはあまの袖ぬ

らすらん(487)

旅宿恋といへることをよめる

修理大夫顕季

恋しさをいもしるらめや旅ねして山のしづくに袖ぬらす

とは(488)

「(68丁オ)

人のゆふかたまうてこむと申たりければよめる

一宮紀伊

うらむなよかけみえかたき夕月夜おほろけならぬ雲まつ
身を(489)

蔵人にて侍ける比うちをわりなくいて、女のもとに

まかりてよめる ふちはらの永実

三日月のおほろけならぬ恋しさにわかれてそいつる雲の上
より(490)

周防内侍したしくなりて後ゆめくこの事もらす

など申ければよめる 源信宗朝臣

あはぬ夜はまどろむ程のあらはこそ夢にもみきと人にか
たらめ(491)

なき名たつといへることをよめる

「(68丁ウ)

左京大夫經忠

人しれすなき名はたてとから衣かさねぬ床は猶そ露けき

(492)

人をうらみて讀る 大中臣輔弘女

あちきなく過る月日そうらめしきあひみし程をへたつと

おもへは(493)

三井寺にて人々恋哥よみけるによめる

僧正公円

つらしともおもはむ人は思ひなん我なればこそ身をはう
らむれ(494)

かたらひける女のもとにまからむと申けれとさはる事
ありてまからさりければ五月雨のころ送侍ける

よみ人しらす

「(69丁オ)

さみたれの空たのめのみひまなくてわすらるゝ名そ世に
ふりぬへき(495)

返し

左兵衛督實能

忘れん名は世にふらし五月雨もいかてかしはしをやま
さるへき(496)

題しらす

よみ人しらす

あま雲のかへしのかせのをとせぬはおもはれしとの心な
るへし(497)

足引の山のまにくたふれたるからきはひとりふせるな
るへし(498)

・御熊野のこまのつまつく青葛きみこそまろかほたしな
りけれ(499)

つのかのまるやは人をあくた川君よりつらきせゝはみ
せしか(500)

あふみてふ名はたか嶋にきこゆれといつらはこゝにくり
もとのさと(501)

かさどりの山に世をふる身にしあればすみやきもをるわ
か心かな(502)

「(69丁ウ)

・こりつもるなけきをいかにせよとてか君にあふこの一

すちもなき(503)

・あふこなき物としるくなになにゝかはなけ木を山とこり
はつむらん(504)

はかるめることのおよきのおほかれはそらなけきをはた
つにや有らん(505)

逢ことのおいまはかたみのめをあらみもりてなかれん名こ
そ惜けれ(506)

あふ事はかたねふりなるいそひたひねふりふすともかひ
やなか覧(507)

あふことのかたの今は成ぬれはおもふかりのみ行にや
ある覧(508)

・近江にかあるといふなるかれいる山君はこえけり人を
ねくさし(509)

・あふ事はなからふるやの板しとみさすかにかけて年の
へぬらん(510)

・かしかまし石のした行さゝれ水あなかま我も思ふ心あ
り(511)

・ぬす人といふもことはりさ夜中にきみか心をとりにき

たれは (512)

「(70丁オ)

・あふ事はふな人よはみこく舟のみほさかのほる心ちこそすれ (517)

源仲卿女

・はなうるしこやぬる人のなかりけるあな腹くろの君かこゝろや (513)

寄石恋といへることをよめる

まし (518)

内大臣家小大進

前斎院六条

あふ事をとふ石神のつれなさにわか心のみうこきぬるか
な (514)

かくはかり恋のやまひは重けれとめにかけさけてあはぬ君哉 (519)

撰政左大臣家にて恋のうたよみけるに

撰政左大臣家にて時々あふといへることをよめる

源雅光

源顕国朝臣

数ならぬ身を宇治川のはしライといはれながらも恋わたる哉 (515)

わか恋はしつのしけ糸すちよはみたえまはおほくくるはすくなし (520)

恋歌十首人々よみけるにくれともとまらすと

恋のうた人々よみけるによめる

「(71丁オ)

いへることをよめる修理大夫顕季

玉津嶋岩うつなみの立かへりせないてましぬ名残さひし

源俊頼朝臣

も (516)

「(70丁ウ)

あさましやこはなに事のさまそとよ恋せよとてもむまれ

さりけり (521)

恋哥とてよめる 春宮大夫公実

寄夢恋をよめる 源行宗朝臣

〔この哥前にあり諸本かくのことし不審〕

※つらかりし心ならひにあひみても猶夢かとそうたかは
れける (522)

俊忠卿家にて恋哥十首人々よみけるをとし

めてあはすといへることをよめる

みなもとのとしよりの朝臣

※あやしきもうれしかりけりをとしむる

そのことの葉にかゝると思へは (523)

〔71丁ウ〕

山家鶯といへることをよめる

摂政左大臣

山さともうき世中をはなれねは谷の鶯ねをのみそなく

(525)

〔72丁オ〕

圓宗寺の花を御覧して後三条院御事などお

ほし出てよませ給ける

三宮

うへをきし君もなき世に年へたる花はわか身の心ちこそ

すれ (526)

花見の御幸をみていもうとの内侍のもとへ遣ける

権僧正永縁

金葉和哥集卷第九

雑部上

むかし道方卿にくしてつくしにまかりて安樂寺に

まいりて見侍けるに梅の我任にまいりて見れば木

のすかたはおなしさまにて花の老木にて所々さき

たるをみてよめる 大納言經信

神かきにむかしわかみしむめの花ともに老木と成にける

かな (524)

かへし 内侍

いく千世も君そかたらんつもりぬておもしろかりし花の

御幸を (528)

大峯にて思かけす桜の花さきたりけるをみてよめる

「(72丁ウ)

先年みしに色もかはらすさきにけり花こそ物はおもはさ
りけれ (532)

僧正行尊

つかさめしの比うらやましき事のみきこえければ

もろともにあはれとおもへ山さくら花より外にしる人も

よめる

藤原顕仲朝臣

なし (529)

年ふれと春にしられぬ埋木は花のみやこにすむかひそな

堀川院御時殿上人あまたくして花見ありきける

き (533)

に仁和寺に行宗朝臣ありと聞て檀帟やあると尋

蔵人おりて臨時祭の陪従し侍けるに右中弁

て侍ければ遣とて上に書付侍ける

伊家かもとに遣ける ふちはらの惟信

源行宗朝臣

山吹もおなしかさしの花なれと雲るのさくら猶そ恋しき

いく年にわれなりぬらんもろ人の花みる春をよそにき

(534)

つゝ (530)

隆家卿大宰帥に二たひ成て後のたひ香椎御社に

山さとに人さまかりて花哥よみけるによめる

「(73丁ウ)

源定信

みな人はよしの、山の桜はなおりしらぬみや谷のむもれ

まいりたりけるに神主ことのもとのすきの葉を

木 (531)

「(73丁オ)

おりて帥の冠にさすとてよめる

神主大膳武忠

後三条院かくれおはしまして又のとしの春さかりなる

千はやふる香椎の宮のすきの葉を二たひかさす我君そき

はなを見て

左近府生秦兼方

み (535)

源心座主になりて初て山に上けるにやすみける

らん (539)

所にて哥よめと申ければよめる

仁和寺にすませ給ける比いつまでさてはなと宮こ

良暹法師

より人のたつね申たりければよませ給ける

年をへてかよふ山ちはかはらねとけふはさかゆく心ちこそすれ (536)

藤原基清か蔵人にてかうふり給ておりければ又の

三宮

日つかはしける ふちはらの家經 「(74丁オ)

かくてのみえそすむましき山さとのほそ谷川の心ほそ
さきに (540)

おもひかね今朝は空をやなかむらん雲のかよひち霞へたて、 (537)

笙のいはやにてよめる 僧正行尊

一品宮天王寺にまいらせ給て日ころ御念仏せさせ

けり (541)

たまひけるに御ともの人々住吉にまうて、哥よみ

良暹法師をうらむる事ありける比む月の朔日

けるによめる 源俊頼朝臣

にまうてきて又ひさしうみえさりければ遣ける

いくかへり花さきぬらんすみよしの松も神世の物とこそ

律師慶範

きけ (538)

・春のこしその日つら、はとけにしを又なに事にと、こ

田家老翁といへることをよめる

ほるらん (542)

中納言基長

對山待月といへる事をよめる

ますらおは山田の庵に老にけりいまいく秋にあはむとす

ふちはらの匡季

「(75丁オ)

この世には山の端いつる月をのみまつ事にてもやみぬへ
き哉 (543)

山家にて有明の月をみてよめる

僧正行尊

・木間もるかたわれ月のほのかにもたれか我身を思ひい
つへき (544)

宇治前太政大臣時のうたよむともをめて月の哥

よませけるにもれにければ公実卿のもとへつかはし
ける

源雅光師イ

春日山みねつゝきてる月影にしられぬ谷の松もありけり
(545)

僧都頼基光明山にこもりぬと聞て遣ける

橘能元

「〈75丁ウ〉

うらやましようき世をいてゝいかはかりくまなき嶺の月を
みる覧 (546)

返し

僧都頼基

もろともににしへやゆくとも月影のくまなき嶺を尋てそこ
し (547)

郁芳門院伊勢におはしましける比あからさまに下
けるにすゝか川をわたりける時よめる

六条右大臣北方

はやくよりたのみわたりしすゝか川おもふことなるをと
そきこゆる (548)

源仲正か女皇后宮にはしめてまいりたりけるに琴

ひくときかせ給てひかせられければつゝましなから
ひき

ならしけるを聞て口すさひのやうにいひかけゝる

「〈76丁オ〉

攝津

琴のねや松ふく風にかよふらん千世のためしにひきつへ
きかな (549)

返し

美濃

うれしくも秋のみ山の松かせにうひことのねのかよひけ

る哉 (550)

月のあかゝりける夜人のことひくを聞てよめる

内大臣家越後

ことの音は月の影にもかよへはや空にしらへのすみのほ
るらん (551)

伊勢国ふたみのうらにてよめる

大中臣輔弘

・玉くしけふたみのうらのかいしけみまきゑにみゆる松
のむら立 (552)

〔76丁ウ〕

宇治前太政大臣布引のたきみにまかりたりける

供にまかりてよめる 大納言經信

しら雲とよそにみつればあし引の山もとゝろにおつる瀧

つせ (553)

よみ人しらす

あまの川これや流のすゑならんそらよりおつる布引のた
き (554)

選子内親王いつきにおはしましける時女房に物申

さむとてしのひて参たりけるにさふらひともいかな

る人ぞ

などあらくまし〜とはせ侍ければたゝうかみにか

きてさふ

らひにをかせける哥 ふちはらの惟規

神かきは木の丸とのにあらねとも名のりをせねは人とか

めけり (555)

〔77丁オ〕

郁芳門院伊勢におはしましける時六条右大臣の北

のかたあからさまにくたりて侍けるにおもひかけす

かね

の聲ほのかにきこえければよめる

六條右大臣北方

神垣のあたりとおもふに夕たすきおもひもかけぬ鐘のこ

ゑかな (556)

前齋宮いせにおはしましける時寮頭保俊みまつり

のほととのゑものゝれうにきぬかりてほとへてかへ

ささり

ける事など申たりける返事にいひつかはしける

はしける

内侍

平康貞女

かへさしとかねてしりにきから衣恋しかるへきわか身な
らねは (557) 「(77丁ウ)

磯なつむ入江の浪のたちかへり君みるまでの命ともかな
(559) 「(78丁オ)

和泉式部保昌にくして丹波国に侍ける比都に

返し

女

哥合侍けるに小式部内侍○「哥よみにとられて侍け
るを定頼卿つほねのかたに」まうてきて哥はいか、
せさせ

なかるするあまのしわざとみるからに袖のうらにもみつ
涙かな (560)
百首歌中に夢のこゝろをよめる

修理大夫顕季

給丹波へは人遣てけんや使またまうてこそやいか、
心もとなくおほすらむなとたはふれて立けるを引
と、

うたゝねのゆめなかりせは別にしむかしの人を又みまし
やは (561)

めて

小式部内侍

旅宿の心をよめる

参議師頼

おほえ山いくのゝみちのとをければまたふみも見すあま
のはしたて (558)

さ夜中におもへはかなしみちのくのあさかの沼に旅ねし
にけり (562)

しほゆあみに西海のかたへまかりたりけるにみると

此集撰し侍ける時哥こはれてをくるとてよめる

いふ

ふちはらの顕輔朝臣

ものをみつからとりて都にあるむすめのもとへつか

・家のかせふかぬ物ゆへはつかしのもりのことの葉ちら

しいてたる (563)

「(78丁ウ)

おとこかれく／＼に成て程へてたかひにわすれて後
人々

式部石山にまいりけるに大津にとまりて夜更て

聞ければ人のけはひあまたしてのゝしりけるを

たつねければ下人のよねしらけ侍るなりと申ける

をきゝてよめる 和泉式部

・鷲のゐる松はらいかにさはくらんしらけはうたて里と

よみけり (564)

公實卿のもとにまかりたりけるに侍らさりけれ

はいてゐるにをきたりける小弓をとりて侍にふれてい

てゝけり此卿かへりて弓たつねければ時房おはし

てまかりぬと申を聞ておとろきて院御弓そとて

かへせといひ遣たりければ御弓にむすひ付たりける

「(79丁オ)

ふちはらの時房

あつさ弓さこそはその高からめはるほとゝなく返すへ

しやは (565)

したしく成にけりなど申を聞て歎ける人にかはりて
よめる 春宮大夫公実

なき名そと人のつらさはしられけり忘れしには身をそ

うらみし (566)

大貳資道しのひて物申けるを程なくさそなど

人の申ければよめる 相模

いかにせむ山田にかこふ垣柴のしはしのまたにかくれな

き身を (567)

肥後内侍おとこに忘られて歎を御覽してよ

「(79丁ウ)

ませ給ける 堀川院御製

わすられてなけくたもとをみるからにさもあらぬ袖のそ

ほちぬる哉 (568)

水くるまをみてよめる僧正行尊

はやせにはたゝぬはかりそ水車われもうき世にめくると

をしれ^{はい} (569)

例ならぬ事ありてわつらひける比上東門院に

甘子たてまつるとて人にかゝせて奉ける

堀川右大臣

つかへつるこの身の程をかそふれはあはれこそすゑに成にける哉 (570)

御返し

上東門院

過ぎける月日のかすもしられつゝこの身をみるも哀なるかな (571)

「(80丁オ)

僧正行尊まうてきて夜とゝまりてつとめてかへる

とてとこを忘たりけるを返し遣とてよめる

大納言家通

草枕さこそは旅のとこならめけさしもをきてかへすへしやは (572)

おとこ心かはりてまうてこそす成にけるのちをき

・たりける糸袋をとりにをこせたりければ書つけて

つかはしける 桜井尼

・のきはうつましろの鷹のゑふくろにをきゑもさゝて返しつる哉 (573)

後冷泉院御時近江国より白鳥をたてまつりたり

けるをかくして人にみせさせ給はさりければ女房たち

ち

「(80丁ウ)

ゆかしかり申けるを各うたをよみて奉れさてよく

よみたらん人にみせんと仰事ありければつかう

まつれる

少将内侍

たくひなく世におもしろき鳥なればゆかしからすと誰かおもはむ (574)

甲斐国よりのほりてをはなる人のもとにありける

かはかなき事にてそのをはか追出ければ

よみ人しらす

・鳥の子のまたかひなからあらませはをはてふ物は追出さらまし (575)

百首哥中に山家をよめる

修理大夫顕季

「(81丁オ)

ひくらしのこゑはかりする柴の戸は入日のさすにまかせ
てそみる (576)

題しらす

藤原仲實

年ふれはわかいたゝきにをく露を草の上とも思ひけるか
な (577)

殿上おりたりける比人の殿上しけるをみてよめる

源行宗朝臣

うらやまし雲のかけはしたちかへり二たひのほるみちを
しらはや (578)

殿上申けるにせさりければよめる

平忠盛朝臣

おもひきや雲の月をよそにみてこゝろのやみにまとふ
へしとは (579)

かたらひ侍ける人のかれくゝに成ければこと人につ

「81丁ウ」

きて筑紫のかたへまかりなんとしけるをきゝて男の
もとよりまかるましきよし申たりければいひつか

はしける

内大臣家○小大進

身のうさもとふひともしにせかれつゝ心つくしの道はと
まりぬ (580)

おとこのなかりける夜こと人を局に入たりけるに
もとの男まうてきあひたりければさはきてかたはらの
局のかへのくつれよりくゝりてにかしてやりたる又
の日そのにかしたるつほねのぬしによへの壁よりう
れし

かりしかなといひつかはしたりければ

よみ人しらす

「82丁オ」

ねるる夜のかへさはかしくみえつれと我ちかふれはこと
なかりけり (581)

源頼家か物申ける人の五節に出て侍けるをきゝてま
ことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのかく
れなき

よにとよみてつかはしたりける返しによめる

みなもとの光經母

日影にはなき名たちけりをみ衣きてみよとこそいふへか
りけれ (582)

經信卿にくしてつくしにまかりたりけるに肥後守盛房

劔のあるみせんなど申て音せさりければ忘たるやうに

申たりければよめる 源俊頼朝臣

・なきかけにかけゝる太刀もある物をさやつかのまに忘
はてぬる (583)

「(82丁ウ)

大宰の神仙といへる所にひさしう侍ければ同行とも
みなかきりありてさかりにければ心ほそさによめる

僧正行尊

みし人はひとりわか身にそはねともをくれぬものは涙な
りけり (584)

たゝならぬ人のもてかくしてありけるに子をうみける

かもとよりうみたる梅ををこせたりければ

よみ人しらす

・はかくれにつはるとみえし程もなくこはうみむめに成
にける哉 (585)

堀川院御時中宮女房たち亮仲実か紀伊守にて
侍ける時和哥浦見せむとてさそひければあまたま

「(83丁オ)

かりけるにまからて遣ける

前中宮甲斐

人なみにこゝろはかりはたちそひてさそはぬわかもうら
みをそする (586)

保實卿外にうつりて後かのもとの所につねにみ侍ける
かゝみをとかせ侍けるかくらきよしを申けるをきゝて

よめる ぶちはらの実信母

ことはりやくもれはこそは方鏡うつりし影もみえす成ら
め (587)

月の入をみてよめる 源師賢朝臣

にしへゆくこゝろは我もあるものをひとりな入そ秋の夜

の月 (588)

為仲朝臣陸○国守にて侍ける時延任しぬときゝて

「(83丁ウ)

つかはしける 藤原隆資

まつ我はあはれや空になりぬるとあふくま川のとをさかりぬる(589)

したしき人の春日にまいりて鹿のありつるよしなと

申けるをきゝて 藤原實光朝臣

三笠山神のしるしのいちしるくしかありけりと聞そ嬉しき(590)

屏風の繪にしかすかのわたり行人たちわつらふかた

かける所をよめる ふちはらの実經朝臣

ゆく人もたちそわつらふしかすかの渡やたひのとまりなるらん(591)

題しらす よみ人しらす

身のうさをおもひしとけは冬のよもとゝこほらぬは涙なりけり(592)

「84丁オ」

上陽人苦最多少苦老亦苦といへる事をよめる

源雅光

むかしにもあらぬ姿になりゆけとなけきのみこそおもかはりせね(594)

青黛書眉と細長といへる事を

源俊頼朝臣

さりともとかくまゆすみのいたつらにこゝろほそくも老にけるかな(595)

年久修行しありきて熊野にて験くらへしける

に○「祐家卿まいりあひて見けるにことの外に」
瘦をとろへてすかたもあやしけにやつしたり

「84丁ウ」

皇后宮美濃

※夜なくはまとろまでのみ有明のつきせす物を思ふ比かな(593)

僧正行尊

心こそ世をはすてしかまほろしのすかたも人にわすられにけり(596)

大中臣輔弘祭主にもならさりける比祭主に

な (600)

なさせ給へと大神宮に申てねたりける夜の夢に枕

賀茂成助にはじめて逢て物申ける次にかはらけ

かみにしらぬ人のたちてよみかけゝるうた

とりてよめる 津守国基 「(85丁ウ)

草の葉のなひくもまたす露しらいの身のをきところなく歎比か

な (597)

聞わたるみたらし河の水清み底の心をけふそ見るへき

六条右大臣六条家つくりて泉なとほりてとくわ

(601)

皇后宮弘徽殿におはしましける比俊頼西のほそ

たりてみよなと申たりければよめる 「(85丁オ)

殿にて人々物申けるに夜の更行まゝにくるしかり

顯雅卿母

千年まですまんいつみの底によもかけをならへんと思ひ

ければ土にゐたりけるをみてたゝみをしかせはやと

しもせし (598)

女の申ければたゝみは石たゝみをしかれて侍と

宇治平等院寺主になりてうちにすみつきて比叡

申をきゝてよめる 皇后宮大貳

の山のかたをなかめて忠快法師

な (602)

石たゝみありける物を庭ににまたしく物なしと思ひけるか

宇治川のそのみくつとなりなから猶雲かゝる山そ恋し

大原行蓮上人のもとへ小袖つかはすとてよめる

き (599)

天台座主仁覺

・家を人にはなつとて柱に書つけ侍ける

あはれまむとおもふ心はひろけれとはくゝむ袖のせはく

周防内侍

も有かな (603)

すみ侘てわれさへ軒しのふ草しのふかたゝしけき宿か

「(86丁オ)

百首哥中に述懐の心をよめる

みなもとの師賢朝臣

源俊頼朝臣

世中はうき身にそへるかけなれやおもひすつれとはなれ

かはりゆく鏡のかけを見るたひに老その森のなけきをそ
する (608)

さりけり (604)

前太政大臣家に侍ける女を中将忠宗の朝臣と

おとこにつきて越前国にまかりけるに男心かはりて

少将顕国朝臣とともにかたらひ侍けるに忠宗朝臣に

常にはしたなければ都なる親のもとへ遣しける

あひにけりそのち程なく忘れにけりと聞て女

よみ人しらす

のかりつかはしける 源顕国朝臣

うちのむ人の心はあらち山こしちくやしき旅にも有か

こゆるきのいそきてあひしかひもなく浪よりこすときく

な (605)

はまことか (609)

返し

おや

〔87丁オ〕

おもひやる心さへこそかなしけれあらちの山の冬の気色

蔵人親隆かうふり給て又の日つかはしける

は (606)

藤原公教朝臣

おもふ事侍けるころよめる

〔86丁ウ〕

雲のうへになれにし物をあしたつにあふことかたにおり

るぬる哉 (610)

参議師頼

堀川院御時源俊重か式部丞申ける申文に

いたつらにすくる月日をかそふれはむかしをしのふ程そ

そへて中納言重資卿弁にて侍ける時つかはしける

なかれける (607)

俊頼朝臣

かゝみをみるに影のかはりゆくをみてよめる

日のひかりあまねき空のけしきにも我身ひとつは雲かく

れつゝ (611)

これを奏しければ内侍周防をめしてこれか

返しせよと仰事ありければつかうまつりける

周防内侍

〔87丁ウ〕

みよ (614)

人々あまたくして花見ありきて帰てのちかせ

・をこりて臥たりけるに人のもとよりなに事かと

〔88丁ウ〕

なにかおもふ春のあらしに雲はれて

さやけきかけは君のみそ見るへきイそみむ (612)

〔88丁オ〕

尋て侍ければいひつかはしける

平基經

さくらゆへいとひしかせの身にしみて花よりさきにちり

ぬへき哉 (615)

金葉和詠集卷第十

雑部下

公実卿かくれ侍て後かの家にまかりたりけるに

梅花さかりにさけるをみて枝に結つけ侍ける

ふちはらの基俊

むかしみし主かほにても梅かえの花たに我に物語せよ

(613)

かへし 中納言實行

根にかへる花のすかたの恋しくはたゝ木本をかたみとは

後三条院かくれおはしまして後五月五日一品宮の

御帳に菖蒲ふかせ侍ける桜の作花のさゝれたり

けるをみてよめる 藤原有佐朝臣

※あやめ草ねをのみかくる世中におりたかへたる花桜か

な (616)

北方うせ侍て後天王寺にまいりけるみちにてよめる

六條右大臣

難波江のあしの若根のしけゝれは心もゆかぬ舟てをそす

る (617)

〔89丁オ〕

郁芳門院かくれおはしまして又のとしの秋知信かり

つかはしける 康資王母

うかりしに秋はつきぬとおもひしをことしも虫のねこそ
なかるれ (618)

下臈にこえられて歎侍ける比よめる

せきもあへぬ涙の川ははやけれと身のうき草は流さりけ
り (619)

律師實源かもとに女房の佛供養せむとてよ

はせ侍ければまかりて見ければこともかなはずけ
なるをみてかたのことくいそき供養して立けるに
簾のうちより女房手つからきぬ一重と手箱と
を押いたしけるを従僧してとらせてかへりてみ

「(89丁ウ)」

れは銀のうちにかきて入たりけるうた

よみ人しらす

・玉くしけかけこにちりもすへさりしふたおやなからな
き身とをしれ (620)

・大路に子を捨て侍けるをしくゝみに書付侍けるう
た

身にまさる物なかりけりみとり子はやらんかたなくかな
しけれとも (621)

安房守基經にをくれて侍ける比なかされたり

ける人のゆるされて帰たりけるを聞てよめる
ふちはらの知信母

なかれてもあふせありけり涙川きえにしあわを心にたと
へん (622)

心ち例ならぬ比人のもとよりいかゝなど申たりけれ
は
「(90丁オ)」

よめる 　　よみ人しらす

くれ竹のふししつみぬる露の身もとふことの葉におきそ
ゐらるゝ (623)

範永朝臣出家しぬと聞て能登守にて侍ける

比国よりいひ遣ける 藤原通宗朝臣
よそなから世をそむきぬと聞からにこしちの空は打しく

れつゝ (624)

・ 律師長濟身まかりて後そのあつかひをしてあり

ける夜夢にみえけるうた

たらちめの歎をつみてわかからくおもひのしたになるそ

かなしき (625)

顯仲卿女にをくれて歎侍けるころ程へてとひにつか

はすとてよめる 大蔵卿匡房

「(90丁ウ)

その夢をとほ、歎やまさるとておとろかさても過にける

かな (626)

従三位ふちはらの賢子例ならぬ比よろつこゝろ

ほそく覚けるに人の元よりいかゝなど問て侍ければ

よめる

藤原賢子

いにしへは月をのみこそなかめしかいまは日をまつ我身

なりけり (627)

身まかりて後ひさしく成にける母を夢にみてよめる

権僧正永縁

夢にのみむかしの人をあひみればさむる程こそわかれな

りけれ (628)

人のむすめの母の物へまかりたりけるほとをもき病

をしてかくれなんとしける時かきをきてまかりにけ

るうた

「(91丁オ)

よみ人しらす

露の身のきえもはてなは夏草のはゝいかにしてあらんと

すらむ (629)

小式部内侍うせて後上東門院より年比給けるき

ぬをなき跡にも遣けるに小式部内侍とかきつけられ

たるをみて

和泉式部

もろともに苔のしたにはくちすしてうつもれぬ名をみる

そかなしき (630)

したしき人にをくれてわさの事はて、帰けるによめ

る

平忠盛朝臣

いまそしるおもひのはては世中のうき雲にのみまする物

とは (631)

陽明門院かくれおはしましてのち御わさの事はて、

「(91丁ウ)

ましやは (634)

例ならぬ事ありける比いか、などおもひつゝけて

こゝろほそさによめる

みなもとの行宗朝臣

又の日雲のたなひきけるをみてよめる

藤原資信

※いかにせむうき世中にすみかまのいては煙となりぬへ
き身を (635)

さためなき世をうき雲そ哀なるたのみし君は煙と思へは

(632)

白河女御かくれ給てのち俊家の南面の藤花の

さかりにさけるをみてよめる

僧正行尊

範国朝臣にくして伊予国にまかりたりける
に正月より三月までいかにも雨のふらさりけれ
は苗代もえせさりければよろつに祈けれとか
なはてたへかたかりければ守能因歌よみて一宮に
まいらせて雨祈と申ければ参てよめる 「(92丁ウ)

草木までおもひけりともみゆる哉松さへふちの衣きてけ

り (633)

能因法師

兼房朝臣重服になりてこもりるたりけるに出羽

弁かもとよりとふらひたりけるを返しせよと申

天河なはしろ水にせきくたせあまくたります神ならばか
み (636)

ければよめる 橘元任

「(92丁オ)

神感ありて大雨三日三夜をやますと家集にみえたり
心經供養してそのこゝろを人々によませ侍ける次に

かなしさのその夕くれのまゝならばありへて人にとはれ

攝政左大臣

色も香もむかしととける法なれと祈しるしはありとこそ
きけ (637)

法文のありけるをさとなる女房の許より宮に申
さすして忍て取てをこそよと人のもとにいひを
くり侍けるを聞てよませ給へる

三宮

「(93丁オ)

みしまゝにわれはさとりをえてしかはしらせてとりてし
らさらめやは (638)

月のあかゝりける夜膽西上人の許へいひ遣ける

僧正行尊

いさきよき空の気色をたのむかな我まとはする秋のよの
月 (639)

実範上人山寺にこもりぬと聞て遣ける

静巖法師

こゝろにはいとひはてぬとおもふらん哀いつくもおなし
うきよを (640)

八月はかりに月のあかゝりける夜阿弥陀ひしりの

かよひけるをよはせさせ給ひて里なりける女房
の許へいひ遣ける 選子内親王 「(93丁ウ)

あみたふとなふるこゑに夢さめて西へなかるゝ月をこ
そみれ (641)

依釋迦遺教念弥陀といふことをよめる

皇后宮肥後

をしへ置いていりにし月のなかりせはいかて心をにしにか
けまし (642)

清海上人後生なを恐おもひて眠るたるに枕かみ

に僧たちてよみかけゝる哥

かくはかりこちふく風の吹をみてちりのうたかひをこそ
すも哉 (643)

普賢十願文に願我臨欲命終時といへる事

をよめる

覺樹法師

命をも罪をも露にたとへけり消はともにやきえんとすら
む (644)

「(94丁オ)

衆罪如霜露といへることをよめる

覺誉法師

※罪はしも露ものこらすきえぬらんなかき夜すからくゆるおもひに (645)

弟子品の心をよめる 僧正静圓

・吹かへす鷺の山かせなかりせは衣のうらの玉を見ましや (646)

提婆品のこゝろを 膽西上人

法のためになふ薪に事よせてやかてうき世をこりそはてぬる (647)

皇后宮権大夫師時

けふそしる鷺の高ねにてる月を谷川くみし人のかけとは

(648)

龍女成佛をよめる 勝超法師

「(94丁ウ)

※わたつ海の底のみくつとみし物をいかてか空の月と成らん (649)

涌出品の心をよめる 権僧正永縁

たらちねはくろかみなからいかなればこのまゆしろき糸となるらむ (650)

不輕品のこゝろを 覺雅法師

あひかたき法をひろめし聖にそうちみし人も道ひかれける (651)

薬王品のこゝろをよめる

懷尋法師

うき身をしわたすと聞はあまを舟法に心をかけぬ日そなき (652)

人の許にて經供養し侍けるに五百弟子受記

品の心を説けるに繫寶珠のたとひときけるを

「(95丁オ)

聞てたうとかりつるよしの哥讀てかつけ物の

うらに結付て侍けるを見て返しにつかはしける

権僧正永縁

いかにして衣の玉をしりぬらむおもひもかけぬ人もある世に (653)

依他のやつのだとひを人よみけるに此身かけろふ
のことしといへる事をよめる

懷尋法師

いつをいつとおもひたゆみてかけろふのかけろふ程の世
を過すらん (654)

常住心月輪といへるこゝろをよめる

證成法師 (ママ)

「(95丁ウ)

よとともにこゝろのうちにくむ月をあると知こそはるゝ
なりけれ (655)

極樂をおもふといへることを

源師俊朝臣

※四方のうみ浪にたゝよふみくつをも七重のあみに引な
もらしそ (656)

醍醐釋迦会に花のちるをみて

珍海法師

けふもなをおしみやせまし法のためちらす花そと思ひな
さすは (657)

地獄絵に劔のえたに人のつらぬかれたるをみて

和泉式部

あさましや劔のえたのたはむまてこはなにの身のなれる
なるらむ (658)

「(96丁オ)

やまひしてかきりなる旅に成てまどひけれはしと
みのもとに入て大路にをきたりける小草の露の
あしにさはりける程に郭公の鳴けれはいきの下に

田口重如

草の葉にかとてはしたり杜鵑しての山ちもかくや露けき
(659)

かくてつるにおちるほとに

たゆみなく心をかくるみた仏人やりならぬちかひたかふ
な (660)

屏風絵に天王寺西門にてみればそうの舟に

のりてにしさまにこきいつるかたかける所をよめる

源俊頼朝臣

「(96丁ウ)

あみたふとゝなふるこゑをかちにてや

くるしき河をこきはなるらむ (661)

「(97丁オ)

しめのうちにきねの音こそきこゆなれ

行重

いかなる神のつくにかあるらむ (664)

連歌

ゐたりける北のかたにこゑなまりたる人

の物いひけるをきゝて

永成法師

あつま人こゑより北にきこゆなれ

律師慶範

みちのくによりこしにやあるらむ (662)

頼經法師

もゝそのゝ桃の花こそさきにけれ

公資朝臣

「(97丁ウ)

あかねさすともおもひけるかな (666)

田中にむまのたてるをみて

永源法師

むめつの梅はちりやしぬらむ (663)

賀茂御社にて物つくをとのしけるを

聞てよめる 神主成助

はるの田にすきいりぬへきおとこかな

宇治前太政大臣

「(98丁オ)

かのみなくちに水をいけはや (665)

日の入をみて 観暹法師

ひのいるはくれなるにこそ似たりけれ

平為成

たにはむ駒はくろにぞありける

永成法師

苗代のみつにはかけとみえつれと (667)

「(98丁ウ)

瓦屋をみて よみ人しらす

かはらやのいたふきにてもみゆるかな

助俊

つちくれしてやつくりそめけむ (668)

鹿嶋をみて 為助

つれなくたてるしかのしまかな

国忠

弓はりの月のいるにもおとろかて (669)

宇治へまかりけるに日ころ雨のふりければ

みつのいて、賀茂川を男のはかまを○手はぬきて

「(99丁オ)

なに、あゆるを鮎といふらむ

匡房卿いもうと

鶺鴒舟にはとりいれしものをおほつかな (671)

・和泉式部かもにまいりけるにわらう

「(99丁ウ)

つに足をくはれて昏をまきたりける

をみて 神主忠頼

千はやふるかみをはあしにまくものか

和泉式部

これをそしものやしろとはいふ (672)

みなもとの頼光か但馬守にて有ける時館

の前にけた河といふ川のあるより舟

の下けるを藪あくる侍してとはせ

ければたたと申物かりてまかるなりと

いふをくちすさひける

「(100丁オ)

・かも川をつるはきにてもわたるかな

信經

かりはかまをはおしとおもひて (670)

鮎をみて よみ人しらす

・たてかる舟のすくるなりけり

みなもとのよりみつ

これを連歌に聞なして

相模母

あさまたきからろのをとのきこゆるは (673)

よみ人しらす

※・はなくきはちるてふことそなかりける

前太政大臣ゆふして

かせのまにくうてはなりけり (674)

すまひ草といふ草のおほかるを引

「100丁ウ」

すてさせけるをみて

よみ人しらす

ひくにはつよきすまひ草かな

とるてにははかなくうつる花なれと (675)

鳥を軒にさしたりけるかよこ雨

にゆれけるをみて

雨ふれはさしもしとゝになりけり

かさゝきならはかゝらましやは (676)

みのむしの梅花さきたるえたにある

をみて

律師慶暹

〔むめの花かさきたるみのむし〕

「101丁オ」

まへなるわらはのつけゝる

雨よりはかせふくなどやおもふらん (677)

うの水にうかへるをみて

頼算法師

※あらふと見れとくろき鳥かな

よみ人しらす

・さもこそはすみの江ならば夜とゝもに (678)

柱をみて

成覺

おくなるをやはしらとはいふ

見わたせはうちにもとをはたてゝけり (679)

「101丁ウ」

七十になるまでつかさもなくてよろつ

あやしき事をおもひつゝけてよめる

源俊頼朝臣

なゝそちにみちぬるしほのはま楸

〔白紙〕

ひさしく世にもむもれぬるかな (680)

〔102丁オ〕

〔102丁ウ〕